明治二十六年十月十日發行

THE HOME JOURNAL

家庭雜誌

東京家庭雜誌社發兌

定價金五錢

每月二回



第拾五號

◎◎牛乳ノ如ク飲ミ易ク且好味ナリ

此スコット乳菓中ニアル肝油ハ如何ナル胃弱ノモノモ少シノ滞リナク容易ニ服用シ得ル樣ニ調化シアルモノナリ

◎筋肉ノ製造者トシテ有名ナルスコット乳菓肺病、瘰癧、精神疲勞、小兒ノ衰弱症及慢性ノ咳嗽ヲ治スルニ最好最良ノ調劑トシテ夙ニ歐米諸大醫ノ賞贊措カザル處ナリ

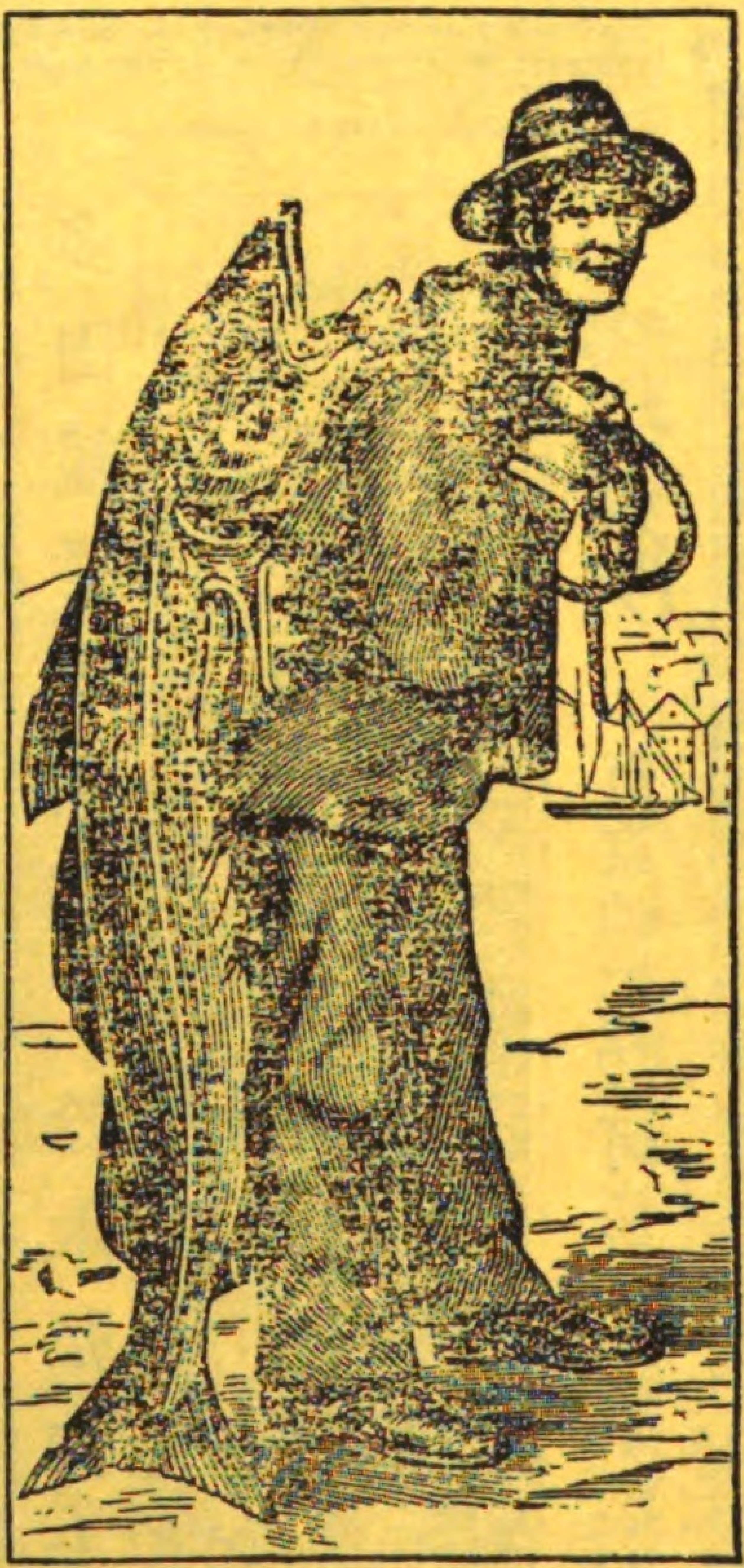
◎龍動スコット及バウン謹製

日本一手特約販賣所

橫濱廿八番
神戸十七番

米國貿易商會

◎賣捌所ハ全國至ル處ニアリ



純粹ノ肝油及次亞燐酸ノ配劑ナル

スコット乳菓

◎民友社出版書籍目錄◎

平田 久著

十二文豪 第一卷 カーライル

定價十八錢 郵稅四錢

早稻田文學の評に曰く此篇希世の文豪トマス、カーライルが一生の事業と其の經歷と特質と趣味ある筆をもて叙説評論し頗る其の要を得たり察するに我が方今の社會何れの方面に於てもカーライルの如き勇猛の偉人を欠けること久し此の一冊子能く幾多の懦夫をして起たしむるを得ん則ち平田氏の功は尋常傳記家の以たるに止まらず

竹越與三郎著

十二文豪 第二卷 マコウレー

定價十六錢 郵稅四錢

每日新聞の評に曰く行文華麗雄渾…竹越氏は平生殆とマコウレーに同情を表せる一人なり…此筆を以て彼の傳記を叙す一隻眼を架くやマ氏の性情、思想、經歷 文體あきらかに現れ來るもの又故ある也マ氏の文を評して恰もパノラマの如し讀者をして中心に立ちて四方を望見するの感あらしむと云ふ此言はやがて著者自身の文章を評したるものと云ふべし…行文一瀉千里順風に帆を上げて行くが如きもの無理ならず

德富健次郎纂譯

グラッドストン

定價二十錢 郵稅四錢

八十四の老翁、六十餘年の政治生涯、三回の大宰相、性行人物、趣味、弱點、長所、履歷、紙上に躍動す。材料の精確、文章の婉宕啾々を待たず是迄人の詳にせざりし少年時代の彼をも描きあり

平田 久著

伊太利建國三傑

定價二十錢 郵稅四錢

此書最も精確なるボートツリチーに據り、伊太利建國の三傑マッチニー。カブール。ガリバルヂーの生涯を叙し且論す、三傑の性情畫くが如く、伊太利の形勢指すが如し。

德富健次郎纂譯

格武電（コブデン）

定價二十錢 稅郵四錢

武雷士（ブライト）

定價十五錢 郵稅四錢

此兩書は英國近世二大平民政治家の性行、履歷を明麗の筆を以て詳に描出したるもの之を讀で利名動かす能はず清節雪の如く熱心火の如く包量海の如く性情春に似たる無双の兩大人と手を執て相談するの感ある可し

竹越與三郎纂譯

格朗穵（クロムヱル）

定價二十錢 郵稅四錢

歷史上の大難間、英國史の絕頂、鐵騎の首領、大抗擊家、沈毅、嚴肅、雄烈の大改革家クロムウエルの傳は著者一氣呵成、雄麗明快の筆を以て述作せられたり

竹越與三郎著

新日本史 上

定價四十錢 郵稅六錢

新日本史 中

定價三十五錢 郵稅六錢

上卷に於ては過去廿年間の政變及ひ外交の歷史を説き盡し中卷には社會の組織より革命の源因を論し皇位の三大變遷を論し一轉して大に思想の衝突を叙し其結果として社會の組織に大變化を來せるを論したり共に痛切破天荒俗流の見を破るに足る其他財政宗教の歷史も亦精確なり

宮崎八百吉著

歸省

定價十五錢　郵税四錢

忽ち深林の中に明月を賞し、忽ち幽邃の境に哲理を考へ、忽ち紗窓に愛人と語る、人生の得意思ふべきなり、其の純雅靜淨の文字を誦するに至ては、坐ろに春風を生ずるの概あり

ユーゴ著　森田思軒譯

懷舊

定價二十錢　郵税四錢

ユーゴー年甫て十五文采秀發藻思湧くが如く始て此編を成す故に戀愛を寫して楚々たるものあり俠を描て磊々たるものあり思軒居士精錬の筆を以て之を譯す復た磨滅すべからざるの好小說家なり

第一 國民小說

定價十五錢　郵税四錢

第二 國民小說

定價十五錢　郵税六錢

第三 國民小說

定價十五錢　郵税二錢

玉の如く、珠の若し、渾然として圓に、瓏然として明なり、圓なるは情の深なるを似めし、明なるは心の曇なきを示めす。泉に似て、流に似たり、潺湲として湧き、滔々として行く、湧くものは盡きず、與窮なきなり、行くものは漲らず、感暴ならざるにあり。

○國民之友第一集　定價二十錢　郵税四錢
○國民之友第三集　定價十五錢　郵税四錢
○國民之友第四集　定價十八錢　郵税四錢
○國民之友第二卷　定價四十錢　郵税不要
○國民之友第四卷　定價五十五錢　仝
○國民之友第五卷　定價五十錢　仝
○國民之友第六卷　定價六十錢　仝
○國民之友第七卷　定價六十錢　仝
○國民之友第八卷　定價七十錢　仝
○國民之友第九卷　定價七十錢　仝
○國民之友第十卷　定價七十錢　仝
○國民之友第十一卷　定價七十錢　仝
○國民之友第十二卷　定價七十錢　仝

德富猪一郎著
○吉田松陰　近刊

停春樓主人著
○德川家康　近刊

品切れ書
○新日本之青年　印刷中
○國民叢書 青年と教育　印刷中

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

平民叢書第七卷
經濟と道德
定價十二錢
郵税二錢

さに調和す可くして而して常に背反するの觀あるは經濟の法則と道德の命令也。道德の命令は經濟の法則によりて司配されざる可からざるか、經濟の法則は道德の命令によりて枉屈されざる可からざるか、抑も亦た兩者圓滑に調和さるゝの途あるか。一方に生產、分配、消費の法則を講究し、他方に精神的修養の要件を討論して此疑問に解答を與へ、更に社會の制度、國家の法律が如何に兩者の關係を安排す可きかを明示したるものは此書也。國家の富榮を希圖し個人の幸福を增進せんと欲するの君子請ふ之れを一讀して千古の疑問を釋せよ。

平民叢書號外
銀貨の過去現在未來
定價十錢
郵税二錢

○自由新聞の評に曰く　現下必要の問題なるを以て平民叢書の號外として世に出づ著者は伊藤銀三郎氏にして簡淨の筆能く銀貨問題の終始を叙す今日の銀貨問題を喃々する者少くとも此書に記するだけの事を知らば又當さに迷岐茫洋の嘆なきを得べきなり

發兌元……東京日吉町　民友社

明治二十六年十月十日發行

家庭雜誌第拾五號

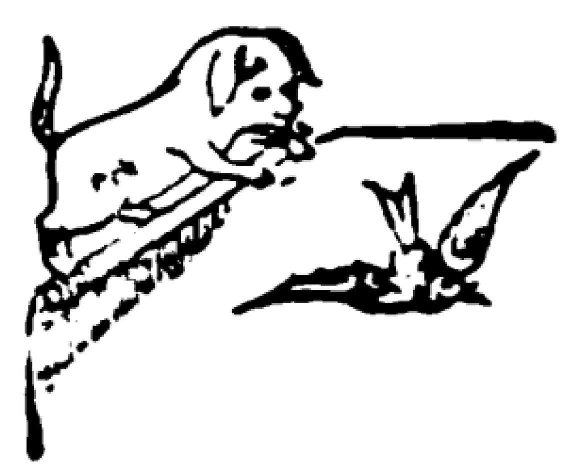
目録



家庭雜誌第拾五號

（明治二十六年十月十日發兌）

社説



奉公人を使ふ心得

『彼も亦た人の子なり、能く之を遇す可し』とは、陶淵明と申す詩人か、幼なき僕を使ふことに附きて、其の子に申し聞せたる言葉なり。深く考れば洵に意味ある名言ぞかし。

誰れの家にも、下女、子守あり、若しくは小間使あり、馬丁あり、車夫あり。地方に於ては、耕作の爲めに平生雇ひ置く作男、作女も亦た少からず。看よ中人相應の家にして、何處にか下女なき家がある、今日に於ては、下女、子守の如きは、何れの家庭にも、欠く可らざる要素と見做すの外なかる可し。されば彼等を使ふ心得に就て、今一通り讀者の注意を促がすも、決して無用のことにあらじ。

若し一家の主人或は、主婦にして、彼等は賃錢を出して、雇ひ置くものなれば、賃錢相當の働きをなさしむるは、決して差支なしとて、彼等をば器械同樣に使用するが如きあらば、是れ大なる僻事なり。人間は器械にあらず、人間は物躰にあらず。五十錢の庖刀は、五十錢の効用ある可く、五圓の柱時計は、五圓の効用ある可し、我々は之を使用するに就て、何の差支もなきことなり。然れども人間は柱時計にあらず、庖刀にあらず、彼等は同じく靈魂を有するものなり、同じく精神を有するものなり、同じく生命を有するものなり。故に彼等を使ふに際して、（第一）に心得可きことは、『彼も亦た人の子なり』と云ふことなり。『雪の日や、彼も人の子樽

拾ひ』、斯く思へば、何となく彼等を憮恤り、彼等を愛するの情油然として生ずる也。使ふもの誠を推して使へば、事ふるものも亦た誠を以て事ふ。苦情もなければ怨もなく、働くものは、奉公人根性を捨て、働き、働かするものは、我か子を使ふが如くにして使ふ也。

（第二）には彼等を『人の子』と思ふのみならず、我が家庭のものと思ふと是れなり。彼等或は六ケ月にして去らん、或は一年にして去らん、然れども家に在る間は、家の者と云ふことを忘る可らず。袖振り合ふも他生の縁と云ふにあらずや、まして我が家に在るものは、何處〳〵迄も我が家の者と心得、萬事萬端に心を用ひ、彼等が今後の成行、身の行末杯も深く考へ、我が身内の者を敎へ導く如く、宜しく敎へ導く可きなり。是れ主婦たるもの丶最も力を竭す可き所なりとす。



（第三）には既に身内の者と思ふからには、彼等をして我が家庭に同化せしむること緊要なり。彼等の始めて來るや、異分子として來るなり。故に其の行儀作法は固より、一切その身の『たしなみ』に到る迄。敎師が生徒を扱ふ如く、慈母が愛兒を誨ゆる如く、親切丁寧に導き。何時の間にやら、彼等も健全にして、和樂なる家庭の要素となるを期せざる可らず。

凡そ家庭の腐敗は、彼等が不健全の空氣より注入せらる丶ことを知らば、彼等を同化せしむるに就ては、決して餘力を剩す可らず。

（第四）同化せしむるに就ては、彼等が性質を見分き。

其の短所を矯め、其の長所を扶け、彼等をして悦び勇んで善に遷り、立派なる人間とならしむと其の主要なり。人心の同じからざる、その面の如しと云へば、能く注意す可き也。藥も病氣に應じて盛らざる可らず。其の性質を見分ると豈に忽かせにす可んや。

（第五）斯く彼等を教誨し、誘導するに就て、最も忘る可らざるは。彼等を使ふ主人若しくは主婦が、自から其の身に省りみ、愧る所なき行狀なり。自から正しからずして人を正さんと欲す、是れ決して出來得可きにあらず。主人若しくば主婦たるものは、宜しく其の身を以て、總て其の使用する人々の活ける手本とならざる可らず。若しその行狀にして正しからざるとあり、或は怒りに任せ、或は興に乘じ、勝手次第の命令を下し、賞罰常なく、勸懲度なく、甚しきは自から申譯けなきとをなして、以て其の使用する人のみ正しからんとを望む、是れ決して出來得可らざるとと知る可し。その身正しければ、令せざるも行はる、行狀は無言の說教にして、且つ有効なる說教なり。

論　說

結婚後の幸福

秀香女史



此頃承り侍りし所によれは外國にては夫婦の間の幸福快樂も結婚後は消え失するものなれはとて、男女ともに結婚を見合せ唯社交上の關係に止むるを宜とすと

か、又は一家を持たは子供も出來自然と責任のみ重なりて快樂も薄なるが故にひとり身にて暮す方氣樂なりとか云ふ奇妙なる說起り、如何にせば結婚後も幸福を持ち續くる事の出來べきやは疑の廉となり居る由なり。かゝる奇說は善からぬものなり。其譯は自然にそむくのみならず、人間が眞正清潔なる快樂を得る所即ち家庭（ホーム）を搆ふる事も出來ず、人類の繼續も望めぬに至ればなり。御國にては未だ加樣の說も行はれす、實際は却て反對の傾きありて、年比になれは何の目當もなく夫婦となる者多く、中には夫婦の間睦まじからす、家內に風波の絕え間なく、一家は苦痛の宿所となり居るもあれは、他日結婚を惡しさまに云ひなす奇說の起らぬにも限らさるへし。然るに彼の奇說の如くならは種々なる弊害起りて社會の風俗を害し、眞正清潔なる家庭の快樂も得られす、人類の繼續にも妨けありぬへし。

左すればかゝる奇說の行はれぬ樣にする事大切なんめり。其行はれぬ樣にせんには如何にせは宜しきやと云ふに、一家の生活方に不自由なからしめ、家政を整頓し夫婦協心同力家內に風波を起さず、家庭をしてよく樂しき所とならしむるの外はあらずかし。男子は日々外に出て勤をなし、または職につきて働き稼き、少しにても其收入を多くする事に骨折り、女子は男子の得たる收入を以て一家の生計を整理し、節儉貯蓄をなし、男子を慰め勞はり勵まし、男女もろ共に其本分を大切にして怠る事なき樣にすれは、つまり家庭も自つとよなき幸福なる場所となりぬへし。若しかくなるを得すして、夫は終日働き己のが家にて其骨折を休めんとて歸れは家の內は取り亂し子供は泣き叫ひ食事の料理も惡しく妻の取扱ひ思はしからずは、落膽、失望憤怒となり、外に出てゝ樂を求むるに至るへし。妻はまた其夫をして日々を樂しく送らしめ、其骨折を休

め、何所にても得る事難き快樂を家庭にて得させ度思ふも、夫たるもの稼き勉むる事なく、怠惰にして身持惡しくは、一家の幸福所か子供の教育も出來ぬ樣になり、夫婦となりし事を悔ふるに至るへし。

或は結婚後に幸福の續かぬは前以て男女の交際親密ならすよく互の性質を知らすして、輕々しく結婚するか爲めなりと云ふ人もあれと、強ち左にもあらぬげなり。其譯は如何程交際親密なりし男女が相互に知り合ひて結婚するとも、各其本分を守らす稼き勉めすは、年を經るに連れて色々の苦情も出て、風波の絶え間なく、その中惡しくなり、夫婦別れを爲すに至る事あるに反して、初め相知らさりし夫婦も艱難辛苦を共にするときは夫婦の情愛は深くなりまさり行くを以ても知らるゝなり。御國にては古より男女交際の途もなく互に相知るの手段もなかりし。然るに夫婦となりし上は夫は其任を全くし、妻は貞節德操を守りて人のかゝみとなるへき行をなして偕老同穴の契りを結ふもあり。これらは前以て相知るよりは寧ろ結婚後に夫婦各本分を盡す方夫婦の間を固むる證據とも見らるへし。

又御國の習慣によれは、女子の育て方は只柔順のみを主とし、もの事の辨へなとは不用なりとせしより、自然と經濟上にもうとく世事にも慣れすして、夫を慰め奬勵し、子供を教育する途も知らす、教育あり働きある夫の好配となる事難し。かくては男子の教育は進歩せる今日と云ひ、女子の責任も重くなり家政を整理し節儉し家庭の教育第一となりし御世と云ひ、女子の本分を盡すに由なかるへく、女子は夫の厄介者となり召仕の如くに使はるゝ外毫しも夫の手助けとなる事能はす、自つと夫に侮られ、夫婦不和家内貧衰の基ともなるへきなり。故に男子の教育を進むると同時に女子にも家政整理に必要なる教育を授くる事は大切の事なんめり。附ては家の内にて女子に家事向きの仕事を教ふ

へきは云ふまでもなく、學校にても裁縫、料理、育兒、衛生其外家政に必要なる事柄を念入りに敎ふるは大切なる事どもなりかし。

凡そ妻たる者の責任は重きものにて、家政の治まると否とは大なる損得の差違あるものなり。家內にて快樂を得難くなれは大概の男子は茶屋遊ひなとを始むるなり。茶屋なとにては誰不足なる貌もせす機嫌とり／＼笑ひ興するより、我家よりは面白くなり、內を外にする樣になるは必定なり。かゝれは妻はいよ／＼おもしろからす、不足勝にて己れも節儉もなさす、夫の取持も惡しくなるより、夫はます／＼我家を厭ひ遂には家業を止めて遊興にのみ沈り少なからぬ金錢を費すより、果ては高利貸の手より金を借り、其利子嵩み、終には產を破り家をも失ふに至る事ありて、御國なとのやうに離婚のたやすき所にてはいともかなしき夫婦別れをするあり。離婚の出來ぬ外國なとにては別居とか云ふ事をなして、一生眞正なる快樂を得る事出來ぬ樣になり行くもありとか承り候ひぬ。

右申し述べし所によれば結婚後も幸福を續くるの一事は輕き事のやうなれども、夫婦となる男女の爲めのみならず、子孫の爲めにも、又廣く云へば一國の元氣を養ふ爲めにも、社會の風俗を淸潔ならしむる爲めにも、よく／＼心を留むべき事なんめり。今日世上の有樣を見聞するにつけ、默し兼ねて心付きしまゝをかくはものし侍りぬ。

科學

筋肉の話

（笑面と泣面）

我等の生きて此の世にある常に動きて一日一刻も靜止することなし。働らくときに動き、休むときにも亦動

き、眠るときにまた動き死するに至つて始めて止む。かく我等の動くは我等の身躰の一部たる筋肉の作用によつてなり、起居動作一として筋肉の作用によらざるはなし、筋肉あつて骨動き、舌動き、口端動き、目動き、瞼動き、鼻うごめき、身躰の總ての部分動く。されば身躰の總ての部分を調査すれば夥たゝしき數の筋肉あり、一本の手と腕とのみにても五十の筋肉あり、全身を通算すれば總計四百五十に達すと敎られたり。肉はまた各々無數の纖維より成り、纖維はまた各々それ〳〵の働を命せらる。

肉の中には多くの筋散布せられ、肉の神經となり、腦と肉とを鎖ぎ、腦の命令を肉に傳ふ。腦より出でたる命令は肉の各纖維に達し、各纖維をしてなすべき所ろを知らしめ、各纖維の働きを統理し、かくて人をして上に動き下に動き右に動き左に動かしむ。四百五十の筋肉、四百五十の筋肉を組織する無慮數萬、數百萬、數億萬の小纖維各一人前の勞働者としてそれ〳〵の職分を有し、それ〳〵の働を與へられたるを思ふても見玉へ。人は職分を有たねばならず、我等は働かねばならぬにはあらずや、我等の頭の髮より足の爪に至るまで、我等の躰中にある總てのものは我等に働け〳〵と諭すなり。

支那の學者は『一擧手一投足の勞』とて輕々しきものゝ如くに云ひなしたれど實は然らず。手を少しく擧ぐるにも、之が爲めに働く筋肉は一ならずして其の數甚だ多し。頭腦は此の多くの筋肉、多くの筋肉を組成する無數の纖維に各個特別の使命を傳へ、各纖維其の命令に從つて爲すべき働きをなし、此に始て手を擧ぐるを得るなり。筋肉は恰かも護謨絲の如く、一伸一縮によりて人の躰を動かすものなれば、一擧手の勞甚だ容易なるが如くに見ゆれども、一方にある無數の纖維は命令によりて縮まらねばならず、一方にあるものは

伸びねばならず、あるは横に縮まり横に伸び、あるは縦に縮まり縦に伸び、少しく縮まり多く伸び、多く伸び少しく縮まらねばならぬなり。

さても歌を唱ひつゝ琴を彈ずるもゝの忙がしさよ。櫛の齒を引くが如くに使者は腦より手、腕、指に送られ、口、舌、喉に送られて無數の纖維を動かす。頭腦はかく一刻も休まず命令を傳ふる間に、其の命令が果して守られ行はれ居るかを知る爲めに一刻も休まず無數の注進を受け取らねばならず、琴の音果して命令の如く正しき歟、喉の音果して命令の如く正しきかを聞き分けねばならず、絲を彈ずる指頭の加減果して正しきかを感じ分けねばならず。かゝる忙がしきことを秩序正しく果し行く腦の力こそ異しけれ。一擧手の勞と雖容易なるものにあらねばこそ、古より良將の兵を使ふを稱贊して手足を使ふが如しとは申したり。

筋肉の作用によつて動くは骨のみならぬことは前にも述べたる如し。かゝる場合に於て最も面白き例は顔色面貌の變化なり。人の顔を樣々に動かすは筋肉の作用にて、此の作用あるが故に人の顔は種々の意味を傳ふるものとなり、內部の情を外部の貌にて示すを得るものとなる。喜ばしきことのありて人の笑ふや、筋肉ありて口の兩端を引き上げ、笑ふこと益々甚だしくして兩端の引き上げらるゝこと愈々甚し。笑へる人の顔



を見れば、兩眼の下に無數の皺の寄せ集まるを見べし。これ笑筋か口を引き上くること甚だ强くして

頬の肉を押上げ、笑の波を眼邊に漂はしむるなり。されば人は皆な、笑は目と關係すること最も多しと思ひ笑へる眼、喜べる眼なとの名稱を附したれども、實は頬の肉を押し上げて笑の波を眼邊に寄する筋の作用なかりせば笑面なるものは出で來す、此の筋肉の作用たにあらば、盲目の人も尚ほ笑ふなり。眠れる小兒の顔に浮べる微笑の美はしさよ、思ふに無邪氣に喜はしき夢は知らさる間に頭腦をして命令を口端に傳へしめたるならん。



口端を引き上くるものゝ外にまた之を引下げ愁はしき顔を作るものあり、眉をひそめしむる筋肉之と共に働らくときは其の人の顔色をして悲しくまた悪々しく見えしむ。此の如き顔と笑顔との差は只た口端と眉間とにあるのみ。怒りたる顔は雙眉をひそめしむる二つの筋と口の兩端を引き下る二つの筋との作用なり。笑へる顔は口の兩端を引き上くる二つの筋の作用なり。悲しき顔、うなたれたる面色とは實は引き下りたる口、喜ばしき顔、引き立つ樣なる面色とは實は引き上りたる口にあるなり。

高慢なる面色を示さんには下唇を押し出すべし、此の作用をなす筋を高慢筋と云ふ。經驗あり思慮ある面色を示さんには額に皺を寄すに如くなし、年若き人々は好んで之をなすものあり、西洋にては此を稱して彼は『額を耕す』と云ふ。此の如き習慣は固より好ましきものにあらず、口は引き下くるな、引き上げよとは愛嬌術の誡なり。

愁ひ、悲しみ、喜ぶの情を顔色によつて示すを得るは

只だ萬物の靈たる人あるのみ。畜犬が喜はしけに主人の顔を見上げたるとき、主人は之を見て我が犬笑へりと云ふ、されど犬は顔によつて笑ふ能はす、只だ尾を掉るを能くするのみ。顔色によつて情を示し得るもの獨り人あるのみとせば、顔色もまた甚だ大切なるものならずや。

文藝

夏休（前々號之續）

嵯峨のや主人

余は由井ヶ濱の水浴より歸るや、其夜燈火を懸けて故郷なる父母の元へやる書面を記しぬ、其は鎌倉の風景の如何に面白く、由井ヶ濱の水浴の如何に愉快なる歟を言ひやりしなり、明れば叉伯父、と正義、と余と三人、江の島に遊びぬ、江の島は鎌倉を去ること二里の地にあり、道は極樂寺の切通、稲村ヶ崎、七里ヶ濱、腰越等を過ぎゆくなり、極樂寺の切通は鎌倉七切通の一ッにして、曾て正慶の昔、新田左中將義貞が一ッ引兩の旗を飜し、時、當手の大將として打向ひし大舘宗氏が、北條勢と激戰して打死したるの地なり、左右は壁立十仭の巖にして、雜樹枝を交へて道を挾み、凉風樹陰より起りて懐に入る、切通の坂盡くる所に一寺あり、極樂寺といふ、昔は隨分の大伽藍なりしが、新田勢打入の時、兵火に罹りて焦土となりしと聞ゆ、左右には連山波濤の如く連なりて西南に向ひて走る、路傍に日蓮袈裟掛の松あり、大舘主從の十一人塚あり、此處を過ぎて行くこと一二丁巉岩壁立の稲村ヶ崎に出づ、稲村ヶ崎よりヶ西腰越に至る關東道七里の海濱、之を世に七里ヶ濱といふ、潮は高く波濤を捲て疊々として寄來る、其狀恰も十里の長堤に似たる怪物の、岸を望んで不思議の戰爭を爲さんと寄來るに似たり、俄然長堤は碎けぬ、恰も不見不思議の巨腕空中に現はれて、不見不思議の大鐵鎚を揮て之を碎きしが如く、瞬間に碎けぬ、碎くると共に百千反の白布は一時に飜

りぬ、飜へると共に白雪は紛として海面より天に向て飛びぬ、愉快、飛沫は颯として面を打て至りぬ、余は覺えず絶快を呼びたり、暫くは默然として此風色を眺むるのみ、時に天は名殘なくすみ渡りて、水は天にうつり、天は水に垂れて、千里一望、水天相接するの所、突忽として聳ゆるものは何ぞや、雲耶山耶、是伊豆の大嶋なり、噴火の煙は柱の如く立昇りて、其末風に立靡けり、濱邊には海士の小屋の一ッ二ッありて、藻塩たく煙は細く空に立つめり、海士の兒の幾人となく海に飛び入りて、高き波には之を潜り、低き波には之に乗る、游泳心のまゝなるも面白し、

余等は此風色を樂しみつゝ貝を拾ひながら波打際をゆけり、波打際は打寄する波に洗はらて、砂清く冷かなれば歩むに殊も快かりし、濱の中央に行合川あり、是日遊の古跡なり、七里ヶ濱盡くる所、海に突出たる一個小丘の地あり、小動といふ、丘上に松あり、其枝常に風に搖れつゝあるより小動と名くるとぞ、北條氏康の歌に、

きのふ立けふ小動のいそのなみ
　いそいてゆかん夕くれのみち

とあるは此所を咏めるなりとぞ、小動を左に見て腰越に入るなり、腰越の入口に萬福寺あり、源九郎の腰越狀あるを以て其名高し、腰越の町盡きんとして道三叉を爲せる所、一山一寺あり、寂光山龍口寺といふ、日蓮上人龍口御難の地とて名跡の一ッとなす、之より左へ折曲りてゆくこと一二丁にして江の島の濱邊へ出たり、

濱邊には葭簀圍の小屋幾つともなく在りて、水浴の客の衣脱ぐに供す、此處の水浴客は此邊に別莊のある富豪家の家族、若しくは此邊の旅店、寺院、農家、町家に宿れる避暑の客にして、其他は江の島鎌倉見物の旅人なるべし、

江の島は欽明天皇の御宇、一夜に湧出でし島山なりと聞ゆ、入口には多くの旅店ありて客を招けり、余等は惠比須屋といふに入りて晝飯を食ひぬ、御馳走は食切れぬ程澤山なりし、此處に二時間餘を休みて、徐ろに

江の島中を見物なしたり、江の島の有樣は人の多く知る所なれば、余は殊更に此處には記す事をなさゞるべし、唯最も余の面白く見物なしたるは貝細工なりし、貝細工を賣る家は、島中甚だ多かりしが、店頭には女が店番をしながら、貝のお屏風は宜しう、貝のお簪は宜しう、貝の簪でもお買ひなすッて、旦那樣此樣な貝のパイプは宜しう、お土産に一ッお召しなすッて、と呼び居たりき、余等は其店の一ッに立寄りて、貝屏風、貝の簪、貝の箸、貝の襟飾等澤山に買ひて、江の島を立出でぬ、斯て先に通りし濱邊を過て腰越に出で、其より車に乘りて家に歸りたり、歸りたる時は早夕暮に近かりき、

余は固山野に育ちし者なれば、海邊の風景は心に珍らしく、飽かず惜しと思ふの情最も切なりし、されば又翌日は未見の海邊に行て見んと思ひ、正義一個を同道して逗子の濱邊に遊びたり、逗子は鎌倉を去ること一里より近かり、若鎌倉の停車場より滊車に乘る時は、十分を出ずして到る事を得、余等が停車場へゆきしは一時頃なりき、正義はおさな心の物好とて、此處に發車を待合はする一群の人を、きよろ／＼として觀察せり、彼等の中には今や此邊の見物を終りて、東京へ歸らんとする華美の姿の紳士淑女もありき、田舍旅人の縫をまとひて、木作の金剛杖を突たるもありき、農夫の近在より近在へ用足しにゆくといふ風のもありき、商人の取引上何れへ歟ゆくといふ風のもありて、老若男女貴賤都鄙、相交はりて群集する者、凡そ四五十人は在りしならん、余等は多く待つに及ばず、滊車は大船の方より來りぬ、余は正義を助けて客車の一ッに乘込みたり、正義は滊車の進む方に向ひて、窓の下に坐するを好むとて窓の下に坐せり、余は其隣に坐せり、後ればせに走入りて余等の向ひに坐したる婦人ありき、正義と相見て莞爾と微笑しつゝ、おや坊ちやん何處へ往らッしやるの、と嬌音を發せり、逗子へと正義は答へぬ、おや左樣です歟、お遊びに、と彼女は問ひぬ、あゝと正義は答へぬ、彼女は小さき風呂敷包を其膝の上に置直して、此方を向て莞爾と微笑せり、彼女は余よ

りも年一ッ二ッ上にて十八九と見えたり、色白く肉肥へて愛敬ある方なりし、彼女は雪の下なる町家の娘なる由正義より聞きたり、余は横須賀へ行く由問はざるに自ら語れり、正義は立て窓より首を出しつゝ前面の山を見たり、又坐りて、如何に逗子の濱邊は貝の澤山ある歟などゝ語れり、滊車は疾くに走りつゝあるなり、忽ちにして室内暗くなれり、客車の中央に釣せる赤燈の光は幽に人々の顔を照して四下朦朧たり、滊車は名越の隧道に入りしなり、正義は立上りておばあけゑと言ひて彼女を威せり、彼女は笑ひながらお厭だ、其樣悪戯をして、言ひながら兩手に正義を抱へて膝の上へ抱上ぬ、正義は其束縛を遁れんとあばれたれども力足らざりし、彼女は正義を締付白き齒にて其指をかみける、俄然として室内明るくなれり、滊車は隧道を出たるなり、彼女は手を離せり、正義は下におり立て微笑せり、彼女は笑ひながら、眞成に悪戯ッ子ですねへと言へり。既にして滊車は逗子の停車場へ着きたり、驛夫が窓を開ける時、正義はお土産三ッと續け玉に彼女を打て、飛ぶ樣に滊車を下りぬ、彼女はつかまゆるに暇あらざりしなり、余も續て下れり、彼女は窓より顔を出して、母樣にいッつけますよと呼べり、正義は笑ひながら、宜よ、お土産三ッで氣が濟んだ、お土産三ッで氣が濟んだと呼べり。彼女は笑ひながら我々を見送りぬ。

逗子の濱邊は停車場を去ること三四丁の距離にあり、波平かに水清く砂はふるひをかけたるものゝ如し、余等は砂上に衣を脱ぎて、走り競と言ひて飛び込みぬ、正義は海に入る四五間にして蹪き倒れぬ、余が囃し笑へる時、彼は苦笑をして立上りながら、道雄樣か走競なんていふものだからだ、失敬な、と怨ずる樣に言へり、余は彼の手を取て、さあ泳がう〳〵と勵す樣に言へり、彼は之に機嫌を直して、泳ぎ始めぬ、余等は一游して岸に昇り、衣服を着て貝を拾ひ始めぬ。

逗子は江の嶋、由井ヶ濱、七里ヶ濱に比ぶる時は、貝の種類最も多し、おやさん貝は外に一面毛の生て居て雨の日に用ふる簑の如く、梅貝は匂ひゆかしき花の兄、

梅花一輪を伏せたるに似たり、舟貝の、中に小さき段ありて、起せし形の舟に似たる、如何なる人歟之に乗るらん、富士山貝の最見事にて、伏せし形は三國一の富士の山、外に類はなかるべし、其他ざく貝の形の塵を拂ふ箕に似たる、角貝の翫具の象牙に似たる、いろく種々數多き中に、余等を最も喜ばしたるは、貝中に宿れる寄生蟹なりき。

正義は岸の貝拾ふに飽きて歟、海中に入りて貝を拾ひ始めしが、忽ち叫びていふ、寄生蟹を捕へたと如何なる珍らしき貝を歟拾ひし、と傍へ寄りて見るに、彼は一個のべい貝を取りて余に示しぬ、手に取りて之を見れば中に一個の蟹の宿れるなりき、是は貝の売を出てあとの返売となりつゝ漂へるを見て、良き家こそありけれと蟹の宿れるなり、蟹は一度此貝中に宿るや、彼の肉の一部は貝売と附着して又出づる事能はず、之より後彼は家を背負ひしまゝ半身を現はして這歩くなり、此蟹は其形最も能く海老に似たり、唯異なる所は二ッの鋏を有するに有るのみ、されど彼の鋏は普通の蟹の鋏の如く左右同一の大さにはあらで、左の方は極めて小さく、右の方は極めて大なり、右は左より大なる事概ね十倍なるべし、是何故に然る歟といふに、若彼の鋏左右等しく生長する時は、彼は貝売の中より自由に半身を出入する事能はざるにぞ、彼は常に右の鋏のみを働かするに因る、此に於て機關は働かす丈其丈發達するの理に因て、彼の右の鋏は左の鋏より大なるなり、余は進化の理の人を欺かず、造化の戯の奇妙不思議なるに感歎して、之を熟視するに、彼は一度余の手が其躰に觸れし後は、売の底にかくれて出んともせざりき、因て又試みに之を水中に入れしに、彼は忽ち半身を現はして其鋏を動せり、更に砂を掘て其中に水をたゝへ、彼を取て其中に投ぜしに、彼は家を背負ひたるまゝ水中を匍匐はじめぬ、余等は此様を見て歡然として打笑へり、

余等は倘幾多の寄生蟹を取らんとて水中に入れり、忽ちにして多くの宿蟹を取る事を得たりき、彼は或はべい貝、或は塔貝、或はきしやで、或は小法螺貝、或は

まひ〳〵等、總て螺旋狀を爲せる貝中に入りて生息せるなり、余輩は總て彼等を取りて水中に放てるに、皆一齊に動き出せり、余等は彼等が家を背負へるまゝ、動樣の面白ければ、尙多くの試驗と看察となしたるが、其は最も多くの愉快を余等に與へたりき、余等は二三時間此處に遊べる間、用意の手籠に溢るゝ尹貝を拾ひ集めぬ、其種類は前に揭げたるもの丶外、帆立貝、あはび貝、子安貝、等を始めとてし名も知れぬ貝の無數なりき、斯澤山に取りたれば最早之にて滿足なり、且つ日も西に傾きぬれば、いざや家路へ昇らんとて元來し路を引返して、停車場へゆけば、恰も好滊車は橫須賀の方より來りぬ、即ち急ぎて切符を購ひて之に乘れば、滊車は安らかに余等を乘せて鎌倉の停車塲に送りぬ、嗚呼愉快なるは海邊の遊びにこそ。

余は既に三日續けて近傍の海邊を遊び廻れり、いざや今日より鎌倉市中は申すに及ばず、其近傍の古跡を尋ねて、中世歷史中の人となりなん、と翌日よりは一連に十日の間鎌倉中を走廻はりて、盡く其舊跡を尋ね廻はりぬ、鎌倉は大頭將軍の覇府を開てより、足利管領家の在住迄繁昌を極めたるの土地なれば、其地の狹き割合には舊跡最も多かり、若し余をして仔細に之を語らしむれば、慥に編んで一冊の書と爲すに足ることを知る、されど、鎌倉の古跡は既に幾多の人の或はしるし、或は語りて、諸君の殆んど知らざるなき有樣なれば、此處に再び之を繰返して、諸君の退屈をかふの恐は爲さゞるべし、然り余は敢て其事を記さずと雖も、此十日間は殆んど日本中世の歷史中を旅行して、自ら其當代の人となれるが如く、懷古の情に堪へざりし、殊に晝間見聞し來りたる所を以て、夜來燈火に對して之を伯父と語り、其當時の事情を審かにし、其形勢を評し、其人物を高下するに至りては、尙一層の興あるを覺えたりき。

余は十有三日の間に於て、既に此地の近傍大略見終りたれば、餘は隨時隨所に見物する事として、走廻はる事は罷となしたり、其間余は又一日として水浴をせざる事なければ、頭の頂邊より足の爪先まで、色は墨の

如く黒くなりて、殆んど濱邊の子と別らぬまでになれり、實に今年の夏は余が生れて以來、一生の愉快なる年なりし、余は其後も山にあけば海に遊び、海にあけば山に遊び、海山二ッながら飽けば、漁村の生活、農夫の稼業を見て、其處に又新しき愉快を見出せり、斯て余が未だ此近傍の遊びに飽かざる中、六十日の休暇は夢の間に過去りて、歸京の運命は忽ち余を迎へ來りぬ、余は歸京の前夜、故鄕なる父母の元に一書を送りて、如何に鎌倉の風景好く、古跡多く、愉快なる地なる歟を記し、且つ又彼の子が如何に此地にありて愉快に此夏を送りし歟を記して、來年の夏は父母も來遊する樣にと勸めやりぬ、扨明れば朝飯をすまして、暑からぬ中にと伯父伯母は申すに及ばず、一同の者にも告別を爲し、倘來月は一日、土曜日より泊りかけにて遊びに來る由を約束して立出ぬ、一同の家族は門前に立て我を見送りぬ、余は、車上よりしば〳〵見返りたるが、正義と秀子の影とは、何時迄も門頭に立て此方を見て居たりき、余は最後に帽子を脱して彼等に向てふれり、彼等は手を擧げ聲をあげて何事を歟叫びたりし、されど余は其聲を聞たるのみ、嗚呼可憐の稚子等よ、幸福は永く彼等の頭に宿れかし。

余は八時幾分といふ滊車に乘りたり、今や鎌倉の名殘なりと思ひて、窓より顏を出して四方を回顧しつゝ、田家、舊跡、江山、碧水に向ひて左樣ならを唱ふる時、滊笛一聲天空に響きて、滊車は運轉を始めぬ、嗚呼一瞬十里、二時間を出ざる中、余が身は早く既に新橋の停車場にありけり、學校教師、教科、朋友某々といふ文字、余が腦髓をぐる〳〵と廻りて、夏休は過去りぬ、嗚呼夏休は過去りぬ、明日よりは舊生活を送りて新生活を迎ふるの日なり、余は、當に喜を以て此日を迎ふべし、左樣なら夏休よ！

田舍人

父母老ひ玉ふか、海に魚あり貝あり、見飢うるか、山に木の實あり、葛の根あり。田舍は神の宮殿に近し、田舍は神の御手に近かし、田舍の人は、人の手を經ず

して直に神の手より渡さるゝものによりて生活す。嗚呼田舎なる哉、田舎なる哉、田舎は人間生活の標準なり、天賦人權の現示なり。

天の都は田舎なり、人の都は都會なり、余は實に都會を愛する能はず、最も都會の生活を厭ふ。都會に在りては一握の石も價なしには之を用ゆる能はず、一木一草『權ある紙』や『價ある金屬』を以て代ゆるにあらざれば、之を取る能はず、都會には『金の權威』ありて『人間の權威』なし、人飢うるの時、人間たるの權を以て、都會に山を爲せる菓の一パンの一片を價なしに食ふとを得ず、而して多くの金を有するものは、金を有するの權を以て、他人の口より美味を奪ふて、壟斷するも亦自由なるにあらずや。余が友に白鷗生なるものあり、彼れは、母の胎内に在る時より此世の一物を有せずして生れたり。彼の生れたるは西國の片隅にてありき。彼れの父は何物をも遺さずして死し、彼れは赤手にして生活の世界に討て出でたり。彼れは先づ農夫として世に立んとせり。肥へたる土地は總ては他人の有となり、人が彼れに餘ましたるは荊棘など繋ける野原と、礫石と砂とにて固めたる土地のみ。嗚呼天は先に此世に生れたるものに此土地を與へたる耶、彼れは斯くの如く歎して、漁夫となれり。彼れは深く海を愛せり。彼れには父なし、母なし、妻なし、彼れは海を以て父とも母とも又た妻とも思ふて之れを愛せり。海も亦た彼れを愛せり。海は彼れを見として彼れを乳養せり。彼れは常に未明より一葉の舟遠く漕ぎ出し、遙かの沖に釣糸を垂れ、明月と鮮魚とを載せて歸れり。彼れ時としては陸地の見へざる遠洋に舟を浮べ、四面茫々として限なきを見て、舷を叩て曰く、小なる哉陸上の王等よ。吾れは海上の王なりと。

此海上の王は、近ごろ飄然として人の都の中にて最も大なる東の都に來れり。彼れ東海道の舊道により五十三驛を經て、高輪に着したりしが、時已に十一時を過ぎ、旅の疲れにて、睡むたくなりければ、よき宿もがなと見渡すに、大なる石門の扉もなく、奥には小森の小丘の上にいと繋けれるを見て、此所倔強なりと石

門を入り、小山に上らんとせしに、忽ち一の男あり、大喝一聲『無禮者、此所は辱なくも農商務大臣伯爵後藤象次郎様の御邸ぞ』と叱せり、彼れは驚て去れり。

彼れは少し歩めり、睡氣益催ふせり。彼れは又た左り側に大なる商家の立てるを見て、其門口を叩き、一泊を求めたるに、内より聲高く罵りて『馬鹿者め、知らぬ人に宿かすまぬけがあるものか』。

増上寺の鐘十二時を響く時に彼れは芝の公園に來れり。彼れは故人に遇ひたる如く喜びて、大樹の下に置かれたる椅子の上に横臥せり。彼れの夢は太平洋の上に漂泊せり。忽ちにして角燈きらめきて、跫音近き、彼れの短き夢は更に短く斷ち切れたり。『これ何者ぞ、警察へ來ひ』。

彼れは昨夜斯の如く余に語り、人の都の久く止まる可らざるを告けて、即時に田舎に去りぬ。

親子遊び（つゞき）

笑面老翁

かくて鰻屋を出で丶福島中佐の人形を見たりしが、稚兒はなか〳〵に喜びて、しば〳〵其愛らしき小さき指もてお馬々々と呼びつ丶指しぬ、こ丶を出で丶池の畔を歩みければ、稚兒は石ポチヤ〳〵と頻りに呼びて、石をひろひ池へ投げこむとの面白さに、しばし池の畔に留りて動かず、それより俄に團扇より大なる煎餅を賣れる店前へ走りゆき、忽ちその一ッを攫み取りぬ、店の老婆は余なる金主の後ろに控へをるを見て、更に一ッの煎餅をとりて稚兒の片手に持たしめんとせしが、余はあながち吝嗇にてはあらざれど、煎餅一枚の代價五厘を拂ひて直ちに兒を拉れ去りぬ、粗製の煎餅を多く食はしむるとを欲せざれば、

かくて凌雲閣の前を通り過ぎ、花屋敷の垣側へかゝらんとする時、兒は俄にコーリ〳〵と呼べり、蓋し鰻飯と鹽煎餅とを食ひたるあとゆゑ、大に渇を覺へて氷をも

とむるなり、乃ち松下の氷店に憩ひ、親も呑み子も呑む、既にして蜘ほどの大蟒の見頭を飼ひをるを拂おとして氷店を出で、花屋敷へと入りけり、

花屋敷の中にては稚兒の大喜びは、實に余の大困りなりき、往く路と復る路との間には、低き杭を立てゝ鐵鎖あるは薬繩もて區劃しあるを、稚兒は鐵鎖の下、繩張の下をば自由自在にぬけまはりて、かしての雁來紅をむしり、こゝの蘭を攫み、あるは小禽を飼ひある鐵網と葭簀との間に入りて進退維れ谷まるなんど、余をして氣をもましむると實に一方ならざりき、

かくて淺草寺の前にて鳩に豆を與へて遊び、雷門内にて二三の玩具を買ひて歸途に就きぬ、

鐵道馬車は稚兒の罪なき夢を載せて奔れり、でん〳〵太鼓の夢、犬張子の夢、金魚の夢、鷄の夢、乳を呑む夢、氷を呑む夢、煎餅を食ふの夢、すべて是等の愛らしき夢、罪なき夢は淺草橋より新橋までの鐵道馬車中にて、かはる〴〵稚兒の腦中に反覆せられぬ、家に到りて目を醒せし彼れは母の懐にありしなり、

彼は目を醒して母にかぢりつき、俄に乳を吸ひ得ざりき、二歳に滿たぬ彼れが母を見ざりし九時間の如何に長かりしよ！、

この日余は何となく人を欺きしやうなる心地して快からざりき、そは想察に富める婦人達が、我等父子を見る眼の何となく妻を喪ひし夫若くは母を喪ひし兒に對する如くなりしゆゑ、少なくとも余は他の精神的慈惠を詐取したる心地したりしなり、されど他をして一場の悲劇を観る如き悲哀の快感を無代價にて得せしめたりと思ひて聊か自ら慰めたりき、

（完）

折らで行く

金風徴かに動て天地白し、美の女神は輕やかに地上に天降り來ませり。野に山に低く又昂く彼女は翔れり。彼女の羽衣より羽がき棄てられたる羽屑は、秋の野邊を装ひぬ。一齊に色づける千草、千々に花さける野邊、何ぞ其の眺望の面白きや。

天上の墜露、地上の珠、盛り來りぬる桔梗の花の瑠璃の盞は手に撮らば恐らくは溢れぬべし。紅匂ふ葛の花萩の・花は誰が家の仙露に醉ふや頗る疑ふに足る。清香を蹴裂く藤袴。假りの宿りを刈萱の花。思の色の穗に出る尾花。彼等が一枝は皆ソロモンの榮華の極みよりも美はしく裝はれたり。而して此の自然の美界を點破しつる、地上の天女あるを看よ。

吾人は今何の言を以て之を賛すべき乎、彼女の無邪氣は神に迫りぬ。彼女の眞率は天に近づきぬ。香露聲無ふして裾を濡し、淸風情有て袂を吹く。

昔者西行之を歌ふらく、

折らで行袖にも露ぞこぼれける
萩の葉しげき野邊の細道。

繪畫

丹青叢譚（承前）

蕉隱生

十三、明兆は淡路の人にして吉山と號す、應永年間東福寺の殿司となる、故に世稱して兆殿司といふ、明兆稚かりし日酷た畫を好みて佛法を修むることはなさで筆を甜め墨を磨して月日を送りぬ、師の坊大道これをみてうたてき明兆のふるまひかな、いかにもして佛の正路を行かしめんとて、屢戒め止むれとも更にきゝ入るべき氣色のみえねは、遂に師弟の約を絶たんとて大に怒りのゝしりぬ、明兆ひとり思へるやう凡そ道路にうち捨られて顧みるものなきは破れ草鞋なり、いまわれは師に見棄られぬ、師の名は大道なれはわれは彼の草鞋にも似たらむかし。さなりわれは破草鞋なりと因て自ら號となし　、かくしても猶筆硯はやます、たま

〱師の坊の不在をうかゝひて紙を展へ毫を揮ひ不動尊像を畫き思の外にすくれて出來たるにひとり笑壺に入りて右より左より眺めける、時に師の坊のそとより還來るをみて、周章ふためき、せんすへなさにうつふせになりて覆ひかくす。みれは火焔の膝を遶りてもえわかるが如し、大道も其神筆に感し服し是より又戒むることとなかりき、されは明兆の畫伎はますゝ上りぬ、殊に佛像、人物は尤も妙を得て我朝の巨擘となすも過きたるにはあらじ、時に東福寺未た涅槃像を貯へさるを明兆うき事に思ひ自ら勵て寫さんとすれとも彩色の料に乏し、因て思ふに當寺中の溪中を尋ねめくりて奇石を聚めその色彩の具にあてんとて、溪を泝ること三四里にして異色の沙石をみる、とりて磨しこゝろみれは、いと鮮かなる色彩を得つ、即ち拾ひ歸りて、日頃の望を遂し得たりき、明兆この圖を畫きつるとき一疋の猫あり常に傍に侍りゐたるを、明兆戯れていふ、汝もこの圖の中に入ましうするやと、即ちその形を寫す、これよりまた猫は來らさりけり。此圖いま猶京都東福寺にありて毎春人々に拜せしむ、實に横二丈縱三丈九尺の大幅にして應永十五年戊子六月日行年五十七破草鞋明兆の二十字を款せり。



無聲詩話

（六）

巨勢氏の畫漸く衰運に向ふや春日基光出でぬ。

基光は藤原氏鎌足六世の孫清隆の子なり。初め巨勢氏金持に學び、佛畫を能くし、終に一家を成せり。之を土佐氏住吉氏の祖とす。兒孫連綿として畫權を握ること九百年。

彼は南都東大寺に居りき、故に春日と稱し、畫所預となり、越前守に任ず。藤氏最盛の世御堂關白道長の時（寛弘中）に沒せり。世彼が相撲繪山水屛風佛像繪等を傳ふ。

此頃又僧徒に圓深延圓延源等ありき。筆法遒勁にして綿麗なり。

基光の子隆能古土佐の勁雋なるより穠麗なるを出し、正五位下主殿頭にて畫所預となり、子孫之を世襲し、巧緻なる大和繪を畫きぬ。畫く所源氏物語あり。後冷泉帝の承保中に沒す。

隆能の子は隆親、亦畫所預となる、沒したるは大治年中なり。

而してかの王朝の明君主後三條帝の頃より崇徳帝戰亂の世に至れる間に、日本繪畫界に一種特殊の色をあらはしたる有名なる鳥羽僧正ありき。



大僧正覺融、醍醐帝の十六子 源 隆國の子なり。年八十八にして保延六年に寂す。幼にして佛を東北院覺圓に學び、法橋法眼より大僧正となり、山城の鳥羽に高

極せり、世よりて鳥羽僧正といふ。日本畫風を宗として別に生面を開き、意匠嶄新筆力勁拔にして擒縦自在なり。格高く神逸し、奇想天外より落るものあり。巧に諷刺畫を畫きぬ。曾て旋風米苞を飄翻するの圖を作て倉吏の奸を訐きし事の如き世の能く知る所なり。後世此種の繪畫を鳥羽繪と稱す。僧正の畫現存する



るの信貴山緣起、栂尾山寺獸戯圖、東寺の嗅屁圖等。」

豐前守宅磨爲遠は近衞帝の時に當りき、佛畫を能くせり。其子爲久當時無雙と稱せられ、源頼朝の爲に觀音を畫きし事あり。子爲行は藤原頼經に仕へて左近將監となりぬ。

土佐氏は隆親の男春日光長、風格高く、近遠淡濃落筆法あり。父に繼て畫所預となり、巧に佛像を畫けり。筆する所年中行事六十卷、及三十六歌仙、保元合戰繪卷等十數種あり。文治中京師に沒しぬ。世光長及び慶恩、吉光、行光、行秀を和畫五筆と稱す、皆土佐氏なり。

慶恩は光長の弟、攝州住吉に居り住吉氏と號せり。畫風兄氏に似て兄氏よりも活氣ありき。建仁中の人。



家政

遊戯



人の一生の事業の成功するとせざるとは、一日を空しく費やすと、然らざるに由りて區別をなし得べし。されば働くべき時に働き、遊ぶべき時には遊び、眠るべき時には眠るは、成功する秘訣なるに、多くの人々遊戯と云ふ事を重ぜんるは憂ふべき事なり。殊に小兒の發育するに當りては、善良にして適當なる遊戯をなさしめざれば、肉躰は虚弱となり、性質は惡習のためにそこなはれて一生の不幸となるべし。我が國にては男兒の遊ぶには獨樂、紙鳶、輪廻し等あり、女兒の遊びには毬、をてたま等ありて、各々その遊びを殊にすれども、元來男兒は活潑に過ぎていたづらとなり、女兒は靜かに過ぎて卑屈となる。もし男兒と女兒と共に遊ぶべき善良なる遊戯のあらんには、女兒は男兒の活潑を學びて卑屈より救はれ、男子は之に反していたづらならざることを得べし。今善良にして男女兒の共に遊びて、面白ふ遊戯の類を左にかゝぐべし。

いろは渡し

この遊びは、童子數人集まりて圓を造りて坐し、順次にいろは四十八字の頭に付く言を云ふなり、例へば初めの童子、(い)なる頭文字の付く言、即ち『いゝ菓子をいたゞきましてありがとう』と云へば、次ぎは(ろ)にて『ろうそくをいたゞきましてありがとう』と云ひ、

次は『はなをいたゞきましてありがとう』次は『にしきをもらひましてありがとう』、次ぎは『ほうびを得ましてありがとう』、『へやびんをもらいましてありがとう』。かく順次に云ふ中に言遂になくなりて、最初に窮したるものに、罰を受けしむべし。(罰の法方は終りにあり)

當て物

この遊びは、遊ばんとする數人の童子の、並立せる中より、主人と客と一人つゝ撰らび、先づ主人に撰らばれし人は、客なる童子を伴ひて、一時他室に移しめ、さて主人のみ初の室に歸り、已れの思ふ處の品物、即ち客に當てさせんと欲する品を、並立せる數人の童子に能く示めしおき、さて他室に轉せし客を伴ひ來りて、之を當てしむるなり。その當つるに當り注意すべきことあり。客は今並立せる童子に向かひ、一人毎に只た一事を問ひ得べく、問はれたる童子は、只だ『ハイ』若しくは『イヘ』とのみ答ふるを得べし。例とへば今主人ありて、上にかけたる額を當てしめんとする時は、客は他室より入り來りたる時、並立せる甲の一人に向かひ、『下にあるものですか』と問へば、甲『否』と答ふ、客は次きて乙に向かひ、『私の右にあるものですか』と問へば、乙答へて『否』と云ふ。客更らに『角なる物ですか』と問へば、丙『然り』と答ふ。かくて色、方角、形等を問ひ定めたる上にて、物品を云ひ當つるなり。之を問ふに當り、注意すべきは、人數に限りある故に、成るべく無駄にならぬことを問ふにあり。一人毎に一度のみ問ふを得べければ、人數多き時は問ふ處多く、當て易すけれど、少數にては隨分當て得る人は稀なるものなり。

魔法遊び

魔法遊びは、その組み立てほゞ上に似たれども、その法方に於て異なるなり。此の遊びに、主人となりたる人は、金盥ひか石炭箱の如き、音のするものと、火ばしの如きものを備へおき(琴の類にてもよし)、主人思ひ定めたる物品は、人の頭の上、或は袖の中或は額の後、或は膝の下等の如き、客の知り易からざる所に隱

しおき、客が所々を探がし廻る時、主人は先きの金盥を火箸にてたゝき、客が定めたる物品に近く時は金盥を強くたゝき、その遠かりたる時は、音を小さくなし、かくて遠近を知るに易からしむ、西洋樂器の備ある家にては殊にその音を作るに便なり。

隨ふ勿れ

此の遊は、四人の童子、各々風呂敷の四隅を握りて坐せる傍に、一人居りて、四人に向かひ、握れと云へば、四人の童子は之を放し、放せと云へば、之を取りて、命ずる所に反せしむ、かくて次第に卒急に之を云へば、誤てその云ふ所に隨ふとあり、その隨ひしものは罰を受くべし。

罰の種類

罰の種類は種々あれども、道具を要せず、又た餘り下品にならぬ罰を用ゆべし。譬へば『隣の客は、柹食ふ客か、柹食わぬ客か』若しくは『桑虫は、桑の葉九枚食ふか、然り桑虫は、桑の葉九枚食ふ』と云ふ如き、まぎれ易き句を數回繰り返して、正しく云ひ得るまで云はしむるか、若しくは罰を受くべき童子の、目をふさぎて、水を飲ましめ、誰か水を與へしかを云ひ當つるまで、之を飲ましむる等の如し。

比喩談

小供の智識を益し、且つ善良なる性質を發達せしめんには、談話に増すものあらず。幼けなき小供にむつかしき道理を、たやすく解り易き樣に話さんには、比喩を以て語るに若くはなし。意味に富みたる比喩談は、眞に小兒を善道に導くの柱にして、なまじいの道徳論よりは力あるものなり。

○二人の姉妹

十七才になれる姉は花と呼び、十五才なる妹はかると呼べるものありけるが。母なる人の姉を憎むこと甚しくして、苦しき業、辛らき仕事は、悉く姉になさしめ、妹には美しき衣物を衣せしめ、所々を遊散に伴れ歩くをもて、一日のわざとしたりけり。或る日、姉は例の如く、破ふれたる衣を衣て、兩手に桶をさげ、

水を汲まんとて井戸に行きけるに、おかしげなる一人の老婆が、働き勞かれたる樣にて、花子の傍に來り一杯の水を乞へり。花子は性質美はしく憐みの心つよきものなりしかば、いたわしく思ひ、懇に慰めて一杯の水を與へけるが、老婆は大に喜び花子に云ひける樣、『御身の如き良き性質の者をして、長く苦しましむるはいたましきかぎりなり。これより御身が求むる物は、何にても立ち所に得せしめん。』と云ひ終りて何所に行くとなく跡を昧ませり。花子は事の不思議に驚きて、家に歸りその事を母に告げんとして、口を開くやその口よりは直ちに美しき金剛石の指輪出で、顏は見る間に美しくかゞやき、破れたる足袋は美くしく變り、裂けたる衣は、花の開きたるも及ばぬほどの美しきものとなりて、見る〱美しき貴婦人母の前に立つに至りぬ。此樣に驚きて、母と共に一部始終を聞き居たる妹は、大に羨みていそぎて其の井邊に行きけるに、うら若き婦人の勞れたる樣にて、今や釣瓶を上げんとして立ちけるが、妹を見て手を止め己がために一杯の水を汲まんことを依賴せり。かねて短氣なるかゝる子は、此の婦人を何ものとも知らざれば、忽ち怒りて云ひけるは、『御身はうら若き壯健の婦人ならずや、余は御身の下女にもあらずいかで御身に使かわるべき。』と此時彼婦は白眼にてかゝる子を見つめて『汝惡くらしき者よ、余が口よりは蝦蟆を出だし、汝が一生は咀わん』と云ひ終りてまた何處ともなく消へ去りたりしかば、かゝる子は驚き愴わてゝ家に歸りぬ。誠の心がけなくして得物のために僞善せんとするものは、かゝる子に似たりと云ふべし。

話のたね

○奇妙なる處女　奇妙なる處女とは誰ぞ

余は奇妙なる處女なり。余は我が國に起りたるとは、他人の名譽にせよ、珍らしき話しにせよ、何に限らず之に關係し、日毎に老ひ、死するかと思へば日毎に蘇生して、新しきものとなり、或は讃美せらるゝ時にあり、或は誹らるゝときもあり、或は虚を云ひ、同じ日

に眞を云ふ。余が若かき時は、國民の談柄となりしが、古くなるに隨がひ次第に忘られんとせり。朝に用らるゝものにして、余の如く愛玩せらるゝ處女は稀なるべし。されど暮となりては無用と呼ばれ、誰も顧る者なし。そも余を誰なりと思ふや。

『余は新聞紙なり』。

○余を善く用ひよ

余は世界中にて、最美の美人となり得れども、又た天地の間に最醜婦ともならざるべからず。余は善く用ゆれば善くなり、悪しく用ゆれば悪しくなる。去れど余の背の皮を剝がるゝ時は、余は忽ち消へ失せて、つまらぬ板となりはつるなり。余を誰なりと思ふや。

『余は鏡なり』。

○足の數の增減する動物

初めは四本の足にて歩み、次ぎに二本の足と化し、終りは三本の足をたのまざるべからざるものを何と云ふ。

『人なり。即ち幼稚の時に四肢にて這ひ、成長しては二本の足となり、老ひては杖を用ひて三本の足となる』。

婦人の容貌には何を記しありや（つゞき）

第三、目　目は通例、人々の重きをおく處にて、眉目清秀なんどゝ云ふ習はしなれども、實は人物の價にはさほど深かき關係あるものにあらず。心の賢愚高下を示めすものとしては、顔の中最も關係薄きものにして、其關係最も重きは、目にあらずして目の周回にあるものとす。若しその目の淵を去つて唯だギロ〳〵と光るもののみとせば、何もさほどの深き譯あるものにあらず。去れども概して云へば目のつぶやかに大きやかなる人には私慾心の強よき、卑劣にして復讐を好む人は少なきものなり。目のよく光るは必しも其人の精神には關係なく、唯だ其人の健康なるを示めすのみ。大なる目は常々英雄を形容する定なれども、大目は多くは饒舌家にして、深く沈みておちつきたる人は、目の光る人多し。此の事につきては之より一層深

入する能はず、唯だ目の光る人は、多くは温和にして、感情的の人にして、目の曇れるは深沈にして、感情强よき人に多しと云ふに止むべし。去れど此とても一定の規まりはなきものゝ如し。凡べて眉の肉、鼻の形、頬の肉等の關係によりて、目の價も變るが如し。要するに目は、人相術に於ては何の價なりと云ふも可なるに似たり。

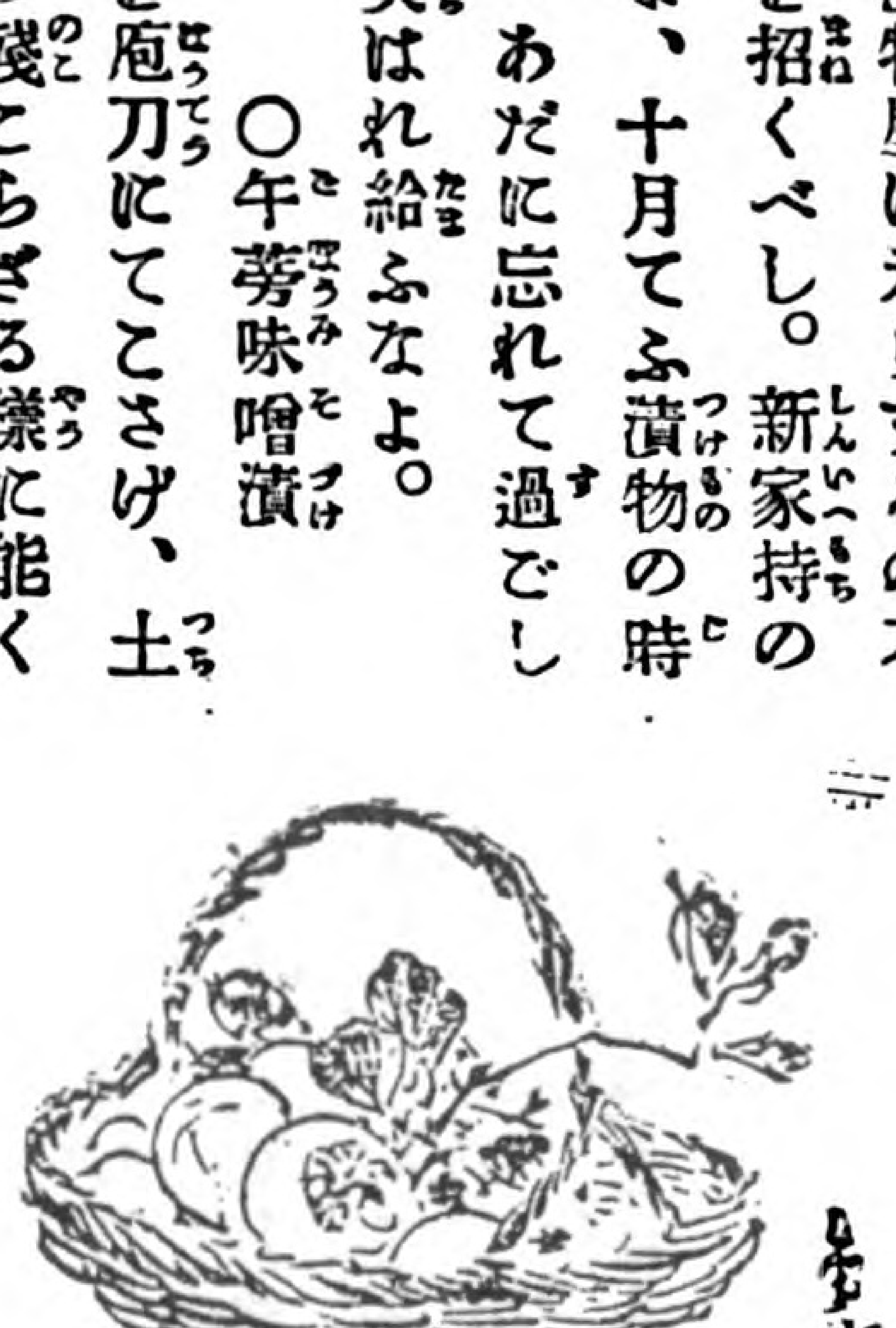
第四、鼻　鼻は人相術中最も必要なる部分にして心の目錄と云ふも不可なきが如し。我若し鼻の梁とも云ふべきものなき、小さき鼻にして、然かも上に向ふたる鼻を有する婦人あらば、考ふまでもなく、直ちに感情的にして、自ら己を制する能はず、些細なることを苦にやみ、變りやすき婦人なりと判斷すべし。若し此の如き鼻を有する婦人にして、其上に絹の如き毛髮を有し、深綠若しくは灰色の目を有する婦人ならば、此婦人は不幸にも、此世に於て獨立の出來ぬ婦人なるべし。若しまた羅馬鼻と云ふ高き鼻あり、鼻梁骨高く、廣く、其下の端がさまでカツキリとせざる鼻あらば、考ふるまでもなく、直ちに判斷力あり、人品を具へたる人なりと云ふを得べし。此種類の鼻は穎敏、獨立心を代表す、若し此鼻ある人にして目の上の骨高くして、目にさしかゝるが如く見へ、耳の上の頭骨にして高くば、これ學者として最も强よき心を有するの記しなり、鼻の大なるは多くは首領たるべき人なり。余は小さくして尖らぬ鼻を有せる婦人にして、大なる技倆ありし婦人には出逢ふたることなし。さて鼻の形右の如くなれば、婦人として最も望ましきは、右の大小、高下の二ツの鼻を折中したるものなり。若しまた經濟の志ある婦人は、如何なる鼻を有するかを知らんとせば、其の鼻廣くして、目と目の間にYの字をおきしが如く見ゆる婦人こそ、其人なれ。若し眉と眉の出合ふ所に鼻の刻なくして、自然に平たく起る婦人ならば、記臆力强よくして、小事を忘れざる人なるべし。此の如き婦人は良妻なるべく、また會社など記臆を要する事務の監督者としてよし。

第五、口　口も大切なる記號にして、其上唇の厚くし

て、下唇を掩ふものは、美麗を害するのみならず、悪性質の婦人なるべし、下唇の突き出たるが如くして、下に向つて屈するは、確實なる心持の婦人なるべし。口の小さきは心持狭く、感情に流るゝ婦人にして、口の大なるは、心もちの自由なる人なれども、擧動は疎そうに失することあるべし。口のしつかりと締りたるは、目的堅固にして、變らぬ婦人にして、上唇の端に三角點あるは、眞面目にして厭世的の人にして、下唇にあるは樂天的の氣樂の人なりと知るべしとは、シヨンペインと云ふ人の實驗談なり。

漬物の時節

冬の用意にと忙がしきは、人と虫類の區別なく、蟻の如き少さき虫すらも、今は晝夜の別ちなく、彼處此處と探かし歩るき、得たる物は一々己が巣に貯へて、不自由なからんことを勉めつゝあり。蔬菜少なき寒中のために、今より萬づの漬け物をなさゞれば、冬の日に使を漬物屋に走らするの不自由を招くべし。新家持の妻君よ、十月てふ漬物の時節を、あだに忘れて過ごし蟻に笑はれ給ふなよ。



○午蒡味噌漬

午蒡を庖刀にてこさげ、土ばみの殘こらざる樣に能くあらひ、長さ五寸許りに切り、さつと湯出して水を去り、冷やしたる後味噌に漬け、一年許りを經て食すれば、天然の香氣は其のまゝ殘りて甘味あり、茶漬けの菜等には尤も妙なり。

○梨子の粕漬

梨子の疵なきものを撰び、桶に酒の粕を充分入れて、その上に梨子を並らべ、又粕を入れて、梨子を入れ、梨子の互に摺れ合わぬように、注意して漬け置き、やがて漬りたる時を見計ひ、出して食すべし。

○隱元さゝげの青漬

隱元、さゝげを取てすじを去り、豆腐の滓を切れにて絞りて、能く水氣を去り、塩を等分に混和して、これに隱元、さゝげを入れをくべし、何時までも色青し、用ゆる時は鹽出しをなして用ゆべし。

○人參の味噌漬

人參の葉を去り、根のおとさきを去り、風通りよき處へ五六日置き、甘鹽にして一ヶ月許り漬けをき、取り出して一日日光にて干し、後味噌に漬けるなり。

○茄子の赤漬

茄子の今頃より出來しものは、種子少なく味美なるが、赤漬には最も適當のものなり。さて赤漬は、茄子のへたを離し、一夜鹽にて漬け、翌日日光に干して水氣を去り、後梅酢に漬けて、赤くなるを度として用ゆべし。

○柹の粕漬

是れより柹の時候となれば、柹の粕漬をなすには今を最も好時候とす。さて柹の未だ青きものを取り、へたを去り、先きの梨子漬の如くにして、柹と粕とを交もく入れ漬くる時は、澁は自然に粕のために失て、味甚だ佳なり。

○三杯酢漬

大いなる大根を薄く輪切となし、日に干し、生姜、蓼及び蕃椒を、共に入れし三杯酢の中に入れて漬くべし。

○蕪の味噌漬

蕪に限らず、凡て野菜類、瓜類を味噌或は粕漬となすには、その漬けんと欲するものを、一夜計り塩漬となし、水氣の去りたる後、之を味噌若しくは粕の中に入るゝとなるが、蕪も又たその法に由り、一夜塩をしをなし、取り出して一日干し、然る後味噌に漬けをくべし。

○昆布の味噌或は粕漬

昆布を一夜水に浸し、砂氣を取り、日に乾かし水氣を取りたる後、味噌或は粕の中に漬くるなり。



料理

○白玉やき

鯛若しくはこちの如き、油氣少くなき魚の骨を去り、身計りとなして擂鉢にいれ、玉子の白味及びうどん粉(若しくは葛)を之に加へて、能く〳〵擂り混ぜ、鹽にて味を付け、(嗜好によりて胡椒生姜わさび等を入るゝもよし)右を鹽を引きたる、かはらけに入れ、上より瓦らけを以て蓋をなし、文火にかけてむすべし。

○和蘭やき

何魚にても、玉子の白味に砂糖にて味をつけ、焼きながら之に塗りて、焦げぬ様に焼く時は、西洋料理とも、日本料理とも付かざるもの出來すべし、之を鉢盛となして食ふに美味云わん方なし。

○花小鯛

小鯛の腹を開らき、骨を拔き取り、皮の方を中に入れて二つに曲げ。頭と尾とをくゝりて薄鹽になし、煮立ちたる湯の中にいれて、再び煮立ちたる時引き上げば、皿に盛りて酢を掛けて用ゆるも、若しくは茶碗吸物等の身として用ゆるも共に美味なり。

○鱸の葛あん

鱸の料理中、尤も美味なるは、あん掛けの法なり、煮るもの、湯出るもの、焼くものは、眞の味を失なふの恐れあれども、之を蒸す時は、眞の味存す。鱸のあんかけは、先づその切身をつくりて、之を篩の如きものにのせて、鍋釜の煮立ちたる湯の上にて蒸し、薄く鹽を振りをろして皿に盛り、葛あんを掛けて食ふなり。

○小金麸

鉛を黄金に化するのそれにはあらねども、價廉く味なき麸をもて美味をつくるは、難きことにあらず、さて乾物屋にて店ざらしとならざる麸を求め、麸一杯に魚の擂り身半杯の割合にて合わせ、玉子一二個を入れ、尚ほ山のいもをおろして加へ、能く混和せしものを、如何様の形ともなし、薄醤油のすまし汁の身となさば、二の膳の汁となして、みごとなる汁を得べし。

婦女職業案内

職業は生活の爲に爲すべきものにあらず、將た世を過す方便にもあらず、實に職業は人間の天職なり、故に男も女も老たるも幼きも富人も貧人も身體の耐る限りは必らず職業に就かざるべからざる事は爰に言ふまでもなし、されども現今我國の婦女子の有樣を見るに、其半は夫若しくは父の力に依りて一生悠々として生を送くるものあり、而して其半は生活の必要に迫られて止むを得ず職業の途に就くものあれども、其多くは生活に迫らるゝも職業を得るの機會なきもの多し、本社は茲に見る所ありて東京に於て婦女子が爲し得られ且つ爲しつゝある職業の種類を探求して之を世に公にし、職業に志ある姉妹等に便せんと欲す、

今東京に於て職業――內職――の重なるものと其賃銀を擧ぐれば、

毛絲の手袋――これは毛絲手袋の指の股と腕首との二個所を編みつける迄にて凡てを編まず、賃銀は一「ダース」(十二揃)六錢、大人にて一「ダース」半は爲し得らる、

彩色――二三年前迄は隨分手間料も高かりしが目下の所にては百枚三錢より七錢に至る、三錢のものは日に百五十枚乃至二百枚、七錢のものは五十枚乃至百枚彩色し得べし、

ハンケチ――「ヘム」(縁縫)は一尺巾位にて一枚七厘より一錢內外、縫取は模樣の疎密により賃を異にすれども一枚二錢位より五六錢、

足袋縫――一足二錢內外、日に五六足を縫ふ、

仕立物――仕立屋にては袷十錢以上十三四錢、袷羽織同上、書生羽織十三四錢以上十七八錢、木綿帶七錢より十錢博多帶十錢より二十錢、內職なれば袷、及袷羽織八錢以上十二錢、書生羽織十三四錢、木綿帶五錢より八錢、博多帶七八錢より十三四錢位の相場、

團扇骨――百本一錢五六厘より二錢內外、一日に二百本は編るゝなり、併し今は秋風と知るべし、

「マッチ」箱張――小百個一錢大百個一錢二三厘、一日

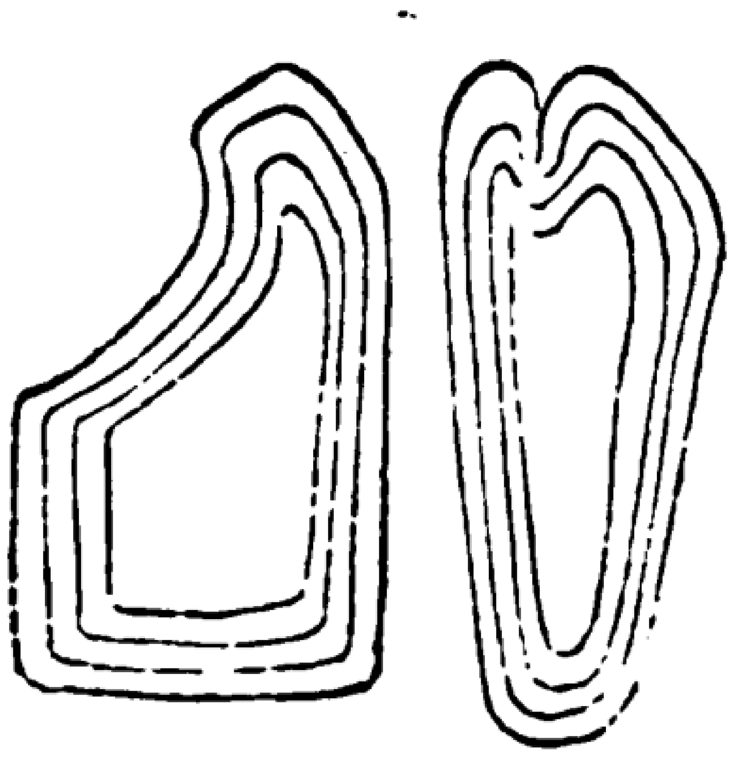
に二百個より二百五十個、これは小兒の仕事なり、一日十時乃至十二時間勞働して僅に十錢以内の賃銀を得、金錢は尊く、衆の人の時間は廉なり、然れども徒しく遊戲して「ナッシング」なるよりは遙に價高し、

手藝案内

足袋の製作

襪に紐附と「ハゼ」附の二種あるは人の知る所にして、當今にては紐附は全く廢れ、「ハゼ」附の世とはなりたれども「ハゼ」附は衣物の裾裏を破るの恐あり、されど簡便なると體裁よきを以て、紐附は極邊僻なる田舍者の外は之を穿くものあらざれば爰には「ハゼ」附の足袋の製作のみを記さん。

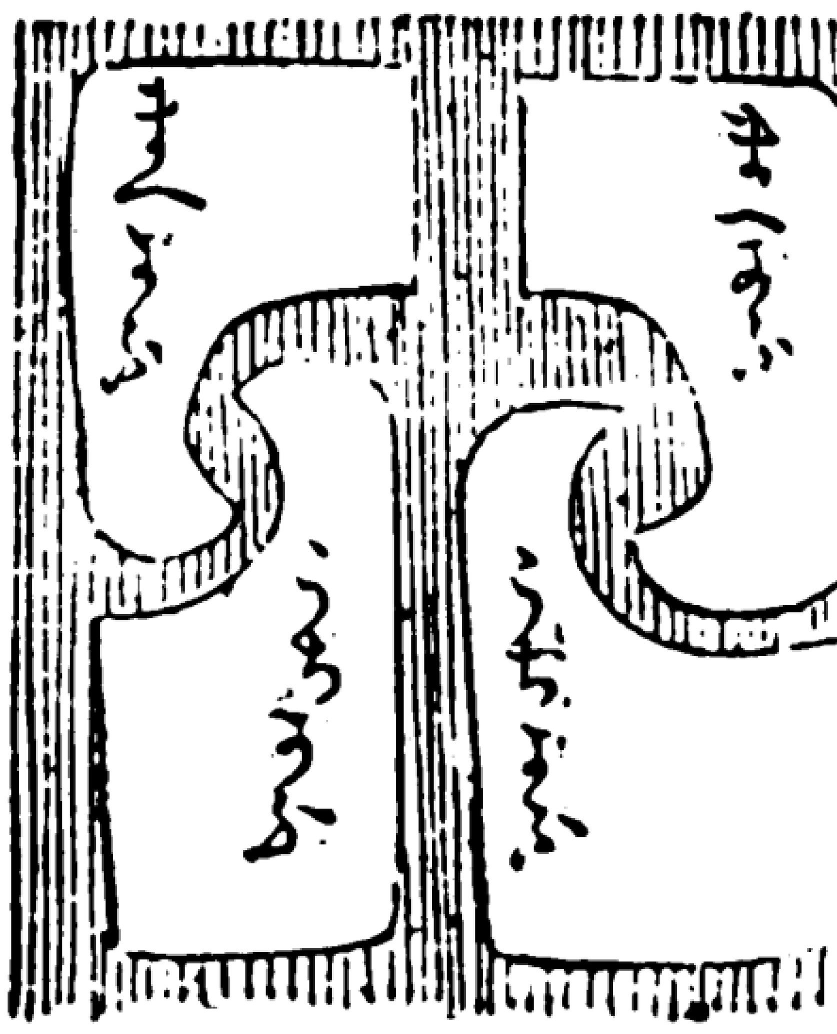
足袋の形には種々あり、譬へは三文より七八文迄は小兒襪にして、それより十文七分位までを普通大人の襪と爲し、其間に於て足の大小に從ひて何文と形を定む、而して文の間に大低三分五分七分と小分して足の大小に好適せしむ、其他に十一文より十二文に至る別誂あれどもこれは西洋人か又は關取より外は稀に見る所なり、斯くの如く文を以て足袋の寸法を定むるは元と寛永通寶の一厘錢を尺度として今に至る迄之を用ゐたるなり。而して一厘錢一文は鯨尺六分四厘位に當り、譬へば十文の寸法なれば鯨尺にて六寸四分位なり。これは踵の所より親指の爪先に至る迄の寸尺にして、襪を製せんと欲する人は此寸法を知るが肝要なり、然れども人々各々是迄已に幾文と定りたれば殊更に足の尺度を測りて寸法を定むるに及ばず、唯だ襪の形を求むればそれにて澤山なり。襪の形は大低是迄一定し居り、東京にては一錢五厘も出さば繪双紙屋等にて小兒より大人に至るまでの襪製作の圖形を購ひ得らるゝなり、



たびのかた

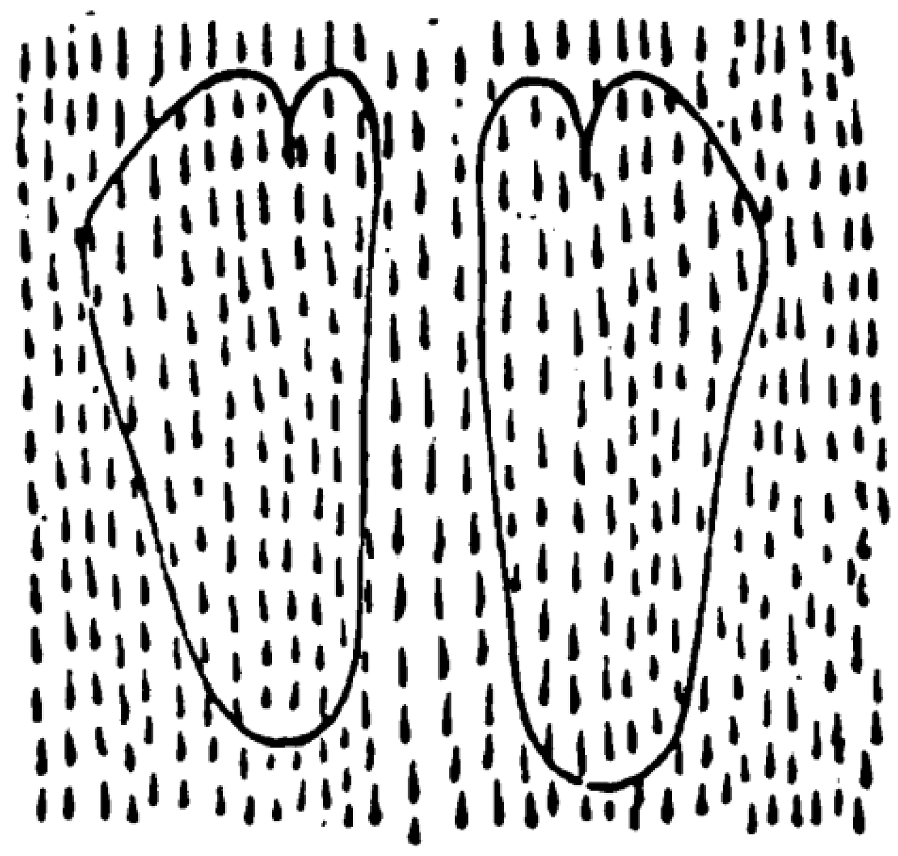
之を購はゞ呉服紙の如き厚紙に切拔き備きて襪の寸法と爲さば何時までも役に立つなり。一足の襪に要する布帛は大小に依りて其寸尺を異にするも大低は人の襪にて木綿巾（九寸）一尺

五寸もあれば澤山なり、其裁方は圖の如し、但し布帛地は人々の好に任せて可なるも男子ならば白又は紺の木綿、又は「うんさい」を用ゐ、婦人には白木綿又は白「キヤラコ」を用ゐて然るべし、裏地は表紺なれば淺黄木綿、白なれば、稍表より劣等なる白木綿を用て可なり



足袋の裁方

底は男女に係はらず紺よりも白きを好しとす、紺の底は疊や履物等に剝抹するゆゑに惡し、暇ある人は木綿切を四五枚重ね、之を雜巾を縫ふが如く粗き木綿絲をもて細密に差子縫を爲し、兩足分則ち二枚を取り得る丈に縫い終り（但し差子縫は隨分巾尺を縮退するものなれば一尺のものは八九寸になると知り玉へ）之に濃糊を施して張板に延し、而して後兩側の布帛と取合するなり、併しこれは隨分



手數かゝると思はゞ足袋屋に底のみを購ひ得らる。縫方と縫合方は別に六ヶ敷ものにあらず、細密に針を運ばせ丁寧に縫ひ行かば、店より購求せしものより遙に手丈夫なる足袋を製作し得らるゝなり。

毛絲の連鎖

毛絲の編方は大抵皆人の知る所なり、而して其製作上に巧拙はあれども七八歲の少女より容易に之を製作し得れば細工の術の左程六ヶ敷ものにあらず、手藝の中にては先づ簡易の業なり。されば暇ある婦女は何人に限らず、老も幼も試み玉へ、可憐なる帽子や、巾着や、肩掛や、手袋や、脚等の手に任せて製作し得らるべし。さて毛絲編物に要する道具は鉤針、針、毛絲の三つの外一物を要する處なく、木綿絲に木製「フーク」、絹絲には鐵製「フーク」、毛絲には骨製「フーク」を用ゐて可なり。而して毛絲編物を最も能く製作し得んとならば、餘り絲を引きしめても宜しからず、又餘り緩くしては毛絲の彈力質を失ふ恐あり、故に緩急宜しきを得て製作物面の手技にして凸凹なきを最上の出來なりと

す。

凡そ編物の種類は夥多なれども第一に其基礎となるは連鎖なり、連鎖には連鎖、二重連鎖、寄連鎖、二重寄連鎖等の區別あり、(甲)は則ち一重連鎖の編かけにして始め「ひきほどき」に結び、「フーク」を以て掬ひ行けば（乙）の如き一重連鎖の進行を得、入用の長さまで「フーク」にて引出しては輪を為し、輪を為しては引出して始めて毛絲の連鎖を得、但し是は編尾の一端を引けばさら〳〵とほどけて始の毛絲に返るなり。


甲
一重連鎖

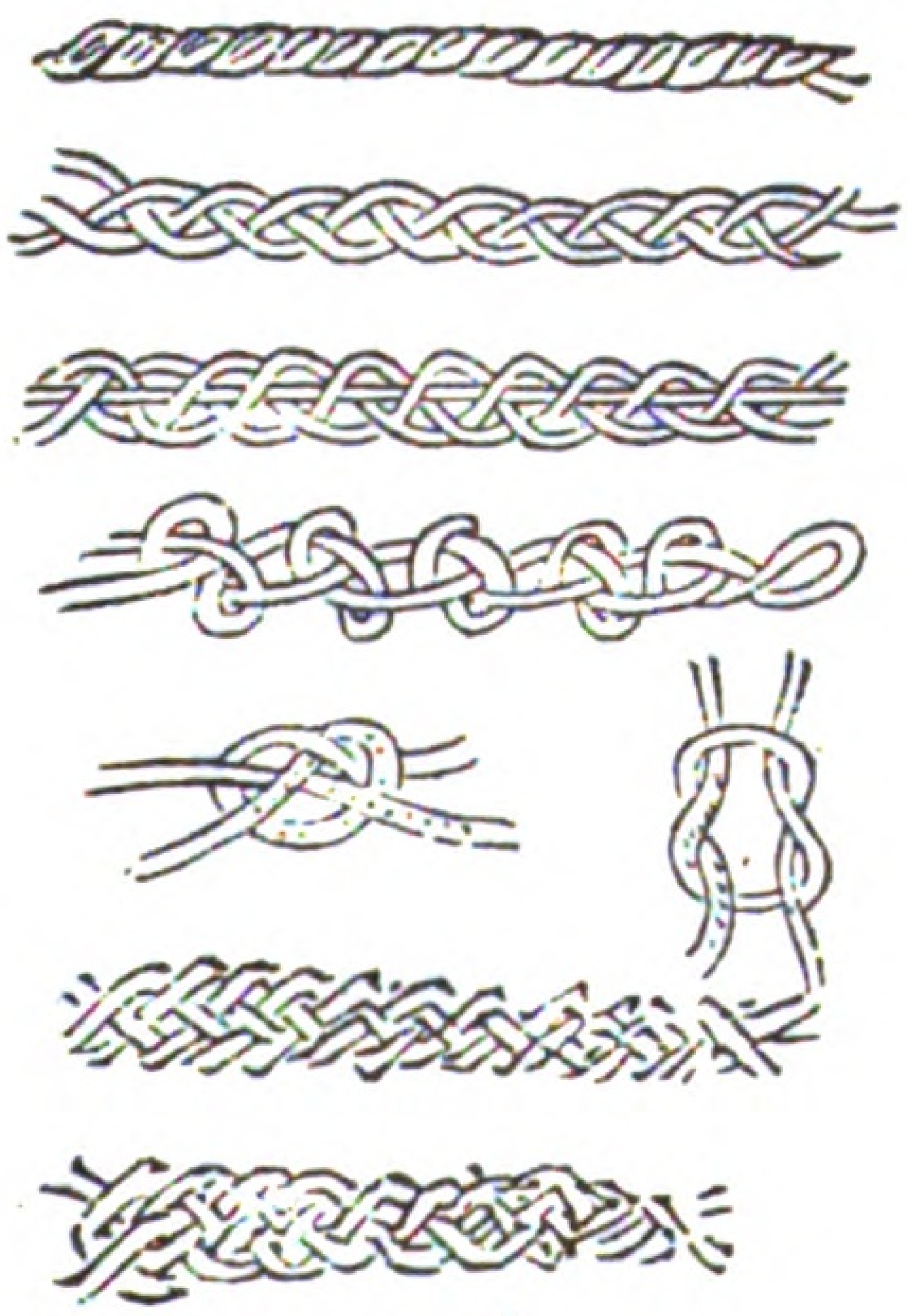

乙
一重連鎖進行


丙 二重連鎖


二重連鎖進行

(丙)は二重連鎖(丁)は其進行なり、これも一重連鎖と編方にさしたる異動なく、則ち(丙)の如く連鎖を二目續けて結び、其二つ目の輪に「フーク」を通し最初の編の左の方へ「フーク」を通し、其餘りの絲を掬ひ出せば、「フーク」に輪二つかゝる、而して前方に垂る、絲を掬ひ二つの輪を一時に引通し、又引出したる輪に「フーク」を通し又第二の輪に通し前方に垂るゝ絲を掬ふことを始の如くすること幾度にして(丁)の如き進行を得るなり。

戊は則ち種々なる連鎖の種類にして、單なる連鎖によりて編まるゝものは單なる製作物を


連鎖之種類

得、密なる連鎖によるものは密なる編物を製し得らるゝと知り玉へ。

社交一斑

西洋禮式一斑（承前）

Y H 子

服裝要具并普通扮裝法

禮は品行なり、而して禮の多き中にて最も重きは服裝の禮なり、前號に於て禮服の大要を記し了りたれば本號には婦人の服裝に要する道具と普通の扮裝法を記さん。

婦人の衣服——婦人の洋裝衣服は通例外國人は四種もあれば夫にて澤山とするなり、其一は平常服、其一は外出服（一寸近邊に行き或は買物に行く時）其一は訪問、遊歩、接待に着する服、其一は音樂會、夜會、劇場等に赴く時に着する服を用ゆれども日本人は外出服（訪問、遊歩、接待等の時に着用する）と別に大禮服を用意し置かば可なるべし。

洋服附屬品——種類夥しければ一々列擧するに遑あらず、其重なるものを擧ぐれば帽子（「シプ」、「ボンチー」、「ハット」の種類なり、西洋にては婦人は帽子のまゝにて室内に入るを許さる）、「コルセット」（所謂蜂腰を裝ふ道具にして多く鯨片を以て造らる、日本人は禮儀上低頭折腰の習慣あれば西洋舶來の儘にては適用に苦むより先年宮内省にては悉く其幾分を裁ち去りし事ありし）手袋（羊皮）長手袋（大禮服に用ゆ）頸飾、腕輪、「ブリチ」、「レース」飾、大留針、帽子の花、櫛、束髮「ピン」指輪、時計、「ゴム」靴、上下「シャツ」、飾玉（衣服の上に飾る、多く黑の「ビーヅ」等を用ゆ）、「ハンケチ」其他寶石、留針、鈕紐等なり、詳くは西洋小間物屋に行きて尋ぬべし。

これより扮裝法の大略を語らん。

頭髮——人に天然の美光を添ゆるものは頭髮なり、衣服の美、寶玉の光何かあらんや、されば婦人には頭髮は最善最要のものなれば平常大切に之を取扱はざるべからず。

美髮法——腦病又は熱病に罹りて頭髮の脫落することあれば、全快後髮根より剃り去るを宜しとす。童兒髮を剃り又は常に髮を短く刈りて髮根を強くするを忘るべからず。髮を刈るには毎月上弦の頃（三日より八日頃迄）を宜しとす。髮の二又に割れたるものは速に除去すべし。髮の脫落する原因は夜間の冷氣若しくは髢を用ゐて頭髮を壓抑して空氣の流通を防ぐに歸因するものなれば常々此事を注意すべし。凡て頭を清潔にするは頭髮を保護する最良法なり、故に石鹼又は「アンモニヤ」少量を加へたる水にて屢々頭部を洗ふを宜しとす。又屢々梳り且つ「アムモニヤ」水に浸したる髮刷にて摩擦するを宜しとす。毎日梳櫛を用ゆるは不可、これは頭髮を拔き去るの恐あり、故に一週間に二回を適

度さす、疎櫛にては毎日梳るを要す。臥蓐より出てて直ぐに梳るは不可なり。常に頭髮のもつれざるやうに心懸くべし。

調髮法——頭の熱する時は牛髓脂か「グリセリーヌ」を髮に附すべし。頭の冷ゆる時は水を燒酎とを等分に混し、之に機那末を加ねて用ゆべし。髮の脫落する原因が髮根の衰弱若しくは機關の衰弱より來りたると認むる時は胡桃葉の煎汁にて朝夕髮を洗ふべし。頭に斑點等の生せし時は細末の鹽にて頭部に摩擦すべし、石鹼にても可。

其他の方法——頭花及び其他の斑點を除き止むる法は三四分宛の距離に髮を分ち蒔く乾きたる細末の鹽にて頭皮を摩擦する事一週間三四回試むべし。寒冷又は病氣の爲に髮の脫落を防ぐには機那末を混じたる燒酎にて屢々髮根を洗ふを良しとす。

束髮——束髮に種々あり、又其時の流行に從ひ種々に變遷すべけれども、總して束髮は人々の顏貌に從ひて撰むべし、現今日本に行はるゝ組髮や渦卷髮や網包髮や、前垂髮や凡て其人々の顏貌と似合しき方に結ぶを良しとす。

束髮の法——自ら束ぬるには兩手を上に伸ばして其肩を平常の位置に保たしめんが爲に起立するを要す、但し他人をして束ねしむる時は腰掛く。每朝手化粧を加ねざる前則ち顏を洗ひて後束ぬるを要す。髮を美麗に束ねんとならば對照の爲めに二の面鏡を用ゆべし。袒裼ぐは宜しからず。斯くせざれば脫髮若しくは頭花等の皮膚に固着するの恐あり。每朝臥蓐を出ると共に髮に觸るゝは宜しからず。少時して血液の身體に巡環するを待ちて試むべし。頭髮を頭の頂上に集め結ぶは頭髮の爲に宜しからず。髮の損傷若しくは其脫落を防がんには、每日同じ形に束ね又は櫛や留針を同じ場所に用ゐ或は日々髮を縮らし若しくば波紋狀に造るなどを廢すべし。髮を保護する最良法は手打組にするにあり、而して緩き手打組最も可なり。束髮の位置を常に變換するは髮の爲に宜し、若し其位置を變ぜざる時は髮は一定の癖を爲して終に他に自由ならざるに至るべし。髱の重くして重きは不可なり、留針を以て束髮を止むるには其針頭を下方に向はしむるは宜しからず。

束髮の要具——疎櫛、密櫛、光澤箸、髮刷、髮針の種類。櫛の中にて最も可なるものは廉價の黃楊櫛、齒並の不規則なるは宜しからず。密櫛を掃除するには細き糸を張り櫛の齒を一々透すにあり、針などにては齒隙を粗くし又は齒を損する事あり。櫛を善く保護するには時々髮刷にて櫛に附着する殘毛等を拭ひ去るべし。一週間乃至二週間に一回「アンモニア」水にて櫛及髮刷を洗ふべし。但し「アンモニア」水は洗頭後の殘餘を用ゐて妨なし。

右は西洋禮式に係る西洋的扮裝なれども凡ての人の髮の摂養なれば凡ての人之を用ゐて差支なし、此外に施粉法、點紅法、畫眉法、染髭法等西洋にては物質的進歩の著明なる程扮裝に於ても細密なれども煩しければ茲に記さず。

流行の栞

七歳の祝衣

春夢

東京に於て來十一月十五日は七歳の女の童に好き綺羅を飾らしめて親々の樂と爲す、此日、日枝神社や神田明神の社頭へ時ならぬかわゆき人の花を以て飾らる美觀は、これぞ東京人が娘の兒を持つ樂事とする七歳着の祝賀なりける。

但し東京にて娘の兒を持ちて最も衣服に入費を要するは、此七歳着と十六七の娘入前となり、されば來十一月十五日までには未だ一個月餘を剩せども親々は今日此頃より心に懸けて祝賀着の仕度に取かゝり、白木屋や大丸邊は此調製に忙し。

是より余に少しく七歳着流行の最なるものを栞せん、普通は二枚重にして少しく上等に至れば三枚重なれば、余は先づ二枚重の方より筆を始むべし、さて二枚重は



第一——上着を草摸樣類の幽禪縮緬にして下着を同しく幽禪の派手なる形か、若しくは紅玉糊縮緬を用ゐ裏を藤色甲斐絹をつくれば可憐此上なかるべし（代價二十二三圓）

第二——京お召の中縞の上着、幽禪縮緬の下着を用ゐ、孰れも紅絹の裏にして藤色の裾、これ何等の美風ぞや（代價同前）、



第三　上着を糸織（十六七圓）下着を變八丈若しくは黄八丈次は三枚重。

第一——上着を鼠縮緬の裾摸樣にして下着を幽禪縮緬の胴拔に仕立て、裏を鳩羽色や藤色肉色の縮緬とても美し（三十三四圓）

第二——上着は白縮緬を藍鼠、鳩羽鼠、紅掛鼠、淡葉鼠に地染さして、其摸樣を韓紅に水くゞる立田川や、萩、桔梗をみなへしの亂咲を愛らしく、四君子、唐草松竹梅、古代菊水、古代桐、若松に千羽鶴を好むも亦めでたからずや、裾は孰れも引返しと知るべし（代價三十八圓）、

第三——第二の好は地色摸樣共に三枚揃にして下着二枚は胴拔なれど更に重寶的に調製すれば譬へば上着を藍鼠色の四君子にすれば下着二枚を鳩羽鼠の立田川に好むべし、（但し下着二枚の中一枚は通しにして一枚は胴拔）かくすれば三枚重の時の外或るときは上着一枚を徹して下着二枚にて着用して衣服の融通自在なるべし、さて此の代價は一組四十三圓位と知るべし。

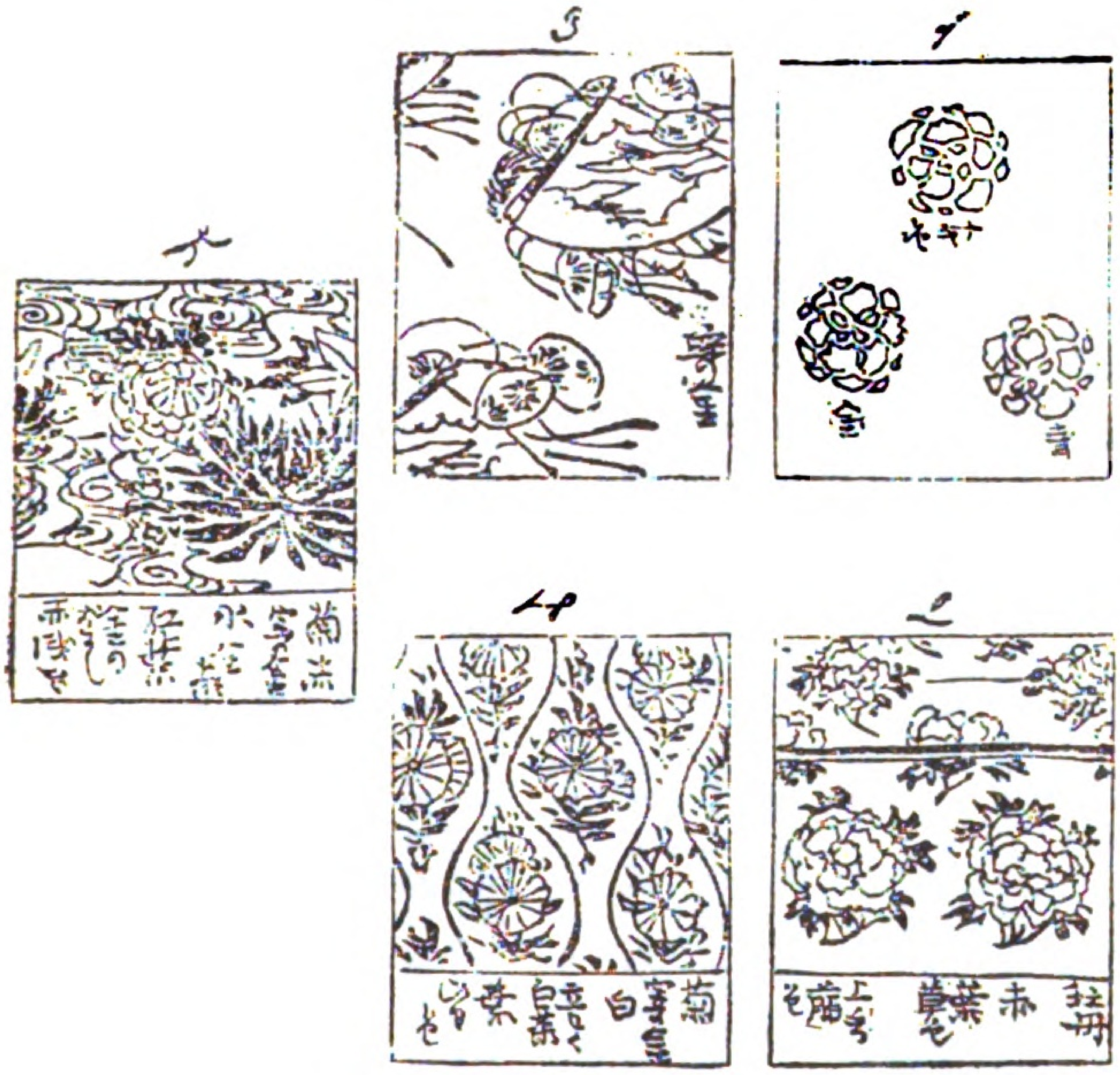


以上は小兒仕立にあらざれば隨つて價も上らざるべからず、併し斯の

如く調製し置かば摸様等に少しく地味の傾向あれども十五六歳までは慥に着らるべし、而して若し小兒仕立にて四ツ身に調製すれば右の價格より二三割を減ずと白木屋は報しぬ。

少女の帶

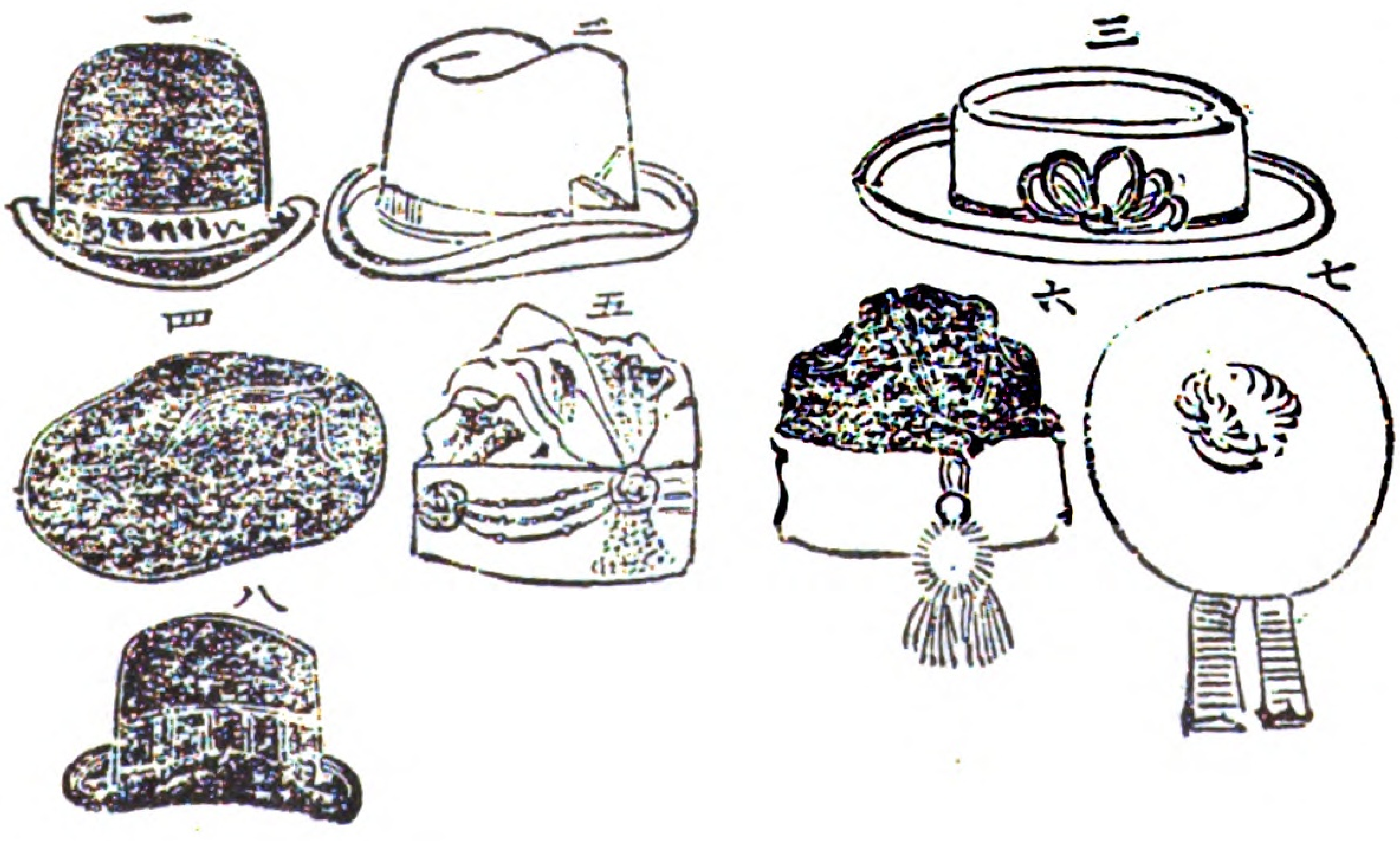
流行の最なるものは第一糸錦、第二は博多織なり、而して其流行摸様



は圖によりて示めさるゝ如く、（一）博多織にして地色は藤、巾は鯨尺一尺四寸（代價七圓五十五錢）（二）地質糸錦にして地色白茶、巾一尺六寸、（代價十五圓）（三）糸錦、地色白茶、巾一尺五寸、（代價十三圓五十錢）（四）糸錦、紅地巾一尺六寸、（代價二十二圓五十錢）（五）糸錦、紅掛色、巾一尺六寸、代價十四圓以上なり、右は流行中の最流行、佳品中の最佳品を撰みたるものなり。

冬帽子

一は則ち紳士的山高帽子、流行は矢張黒にして山は餘



り高からず、コバは挾き方なり（價一圓内外より三圓内外迄の處最も賣口立し）、

二は紳士にも書生にも商人にも向く帽子なり（代七八十錢より以上）

三と四とは婦人用、

五と六よりは小兒用の「キャプ」なり、蝦色や黒の「フラシュ」をもて蝦夷帽子を折りたる如く風情あるは寧ろ可憐ならずとせんや（價（五）一圓二十五錢（六）六十五錢）、

七も小兒用、（黒天鵞絨を以て造らる（價一圓十五錢）、

八も小兒用にして男女に用ゐらる、大人帽子の如く山高に製せられ小さき頭上に置かるゝも面白からずや（價一圓四五十錢）。

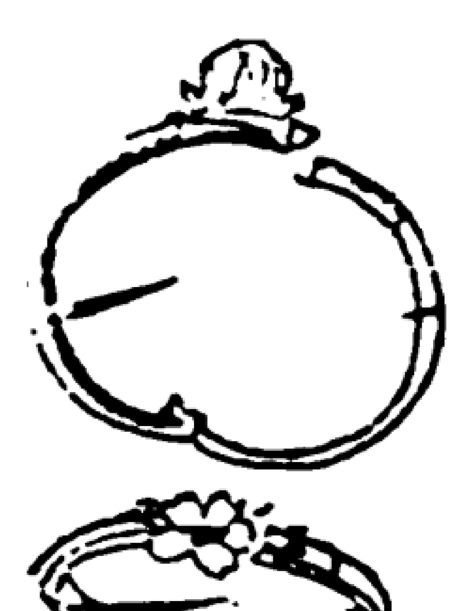
時計の鎖と眼鏡

時計の鎖は様々なれど目下の流行品を記せば普通は廿二金若しくは十八金若しくは赤金プラチナ交り、目方十五匁より廿匁の處最も賣口宜しく、上等に至れば寶石入金鎖なり、其形の重なる流行を擧ぐれば先づ喜平形や長環形や小判環次形。

眼鏡に至れば普通は廿二金若しくは十八金の玉入甲付蔓掛又は半掛最も流行す、上等に至れば赤金「プラチナ」交りを好み、水晶玉を加ふるもの目下の流行眼鏡なり、價格と現品は天賞堂等に就きて明ならん。

前髮止

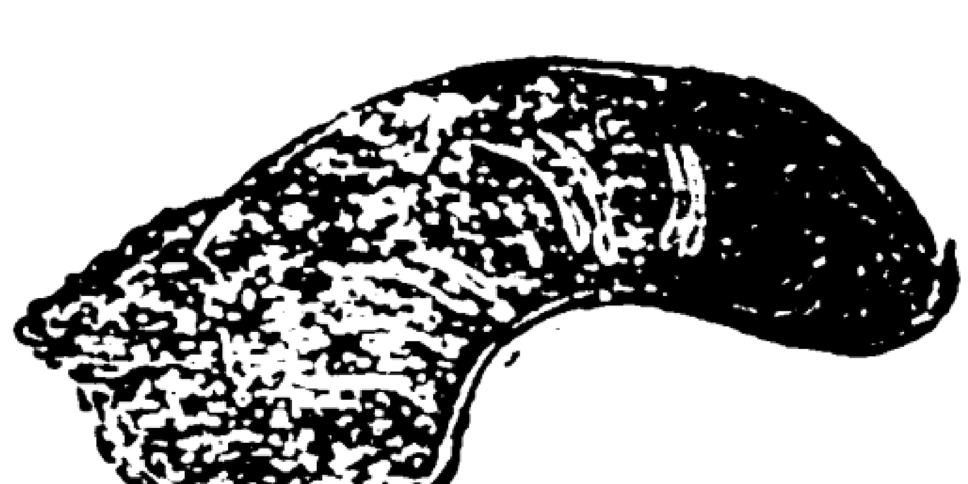
近頃新奇の流行品なり、これは金屬製にして寶玉を挿みたるもありて元結の代となりて前髮を止む、而して前髮の細大に應して伸縮自在なれば調寶之に過ぎず、元結は結髮の度々に新に取代ゆれど、此前髮止は紛失せざる以上は永代婦人髮具の一個となるなり、「メッキ」金消製、



銀製、金製と四様に製造せられ、最上等寶石入は三圓なれども最下等結形花挿様は各種十八錢にて得らるれば元結よりは却つて徳用向なり、專賣品にして尾張町松田白牡丹にて盛に賣捌く。

ぼたん形

これは丸髷の形なり、従來の流行は重に鍋町形なりしも近來は此ぼたん形に流行を魁けせらる、松大（四錢）大一（三錢五厘）一番（三錢二厘）二番（二錢八厘）三番（二錢五錢）、大小は人々の好なれども目下最も丸髷の婦人の愛顧を受くるは大一より二三番の處なりといふ。



ぼたん形

日用品物價

○白米　定期米の暴騰せし爲め聊か小進したり即ち（一圓に付）●一等白米八升八合●二等白米九升●三等白米九升二合●四等白米九升六合●五

等白米一斗
○雜穀　も小進(一圓に付)●新本貨大麥三斗三升●同脇場三斗四升●新ハダカ麥二斗三升●地廻新上小麥一斗八升五合●同脇場小麥二斗
○味噌　新大豆の騰貴せると近來日ツ切冷氣を覚ゆる爲め小賣も少々引締れり、さて其大相場は(一圓に付)●麥麹最上五貫八百目ゟ五貫九百目●同極上六貫五百目ゟ六貫七百目●同次七貫二百目ゟ八貫目●米麹最上六貫六百目●同次六貫九百目
○鹽　(一圓に付)●赤穂三俵七分五厘●大鹽三俵八分●八家三俵八分●本齋五俵七分五厘●新齋六俵五厘●古積上二俵七厘五厘●同中二俵九分
○油　(一樽に付き)●地水八圓四十錢●上三絞九圓二十二錢●荏油十三圓五十錢●桐油七圓五十錢●胡麻油十圓二十錢●星印九圓三十錢
○石油　(一箱に付)●上ホーキ一圓六十五錢ゟ一圓六十六錢●二番同一圓六十一錢●上月ロシキ一圓六十一錢●上錨ロシヤ一圓六十三錢ゟ一圓六十四錢●二番同品切●上チヤスタ一圓六十五錢ゟ一圓六十六錢
○サツマ芋　日下下落して一貫目四錢より七八錢
○栗　一升七八より十二三錢

雜録

遺珠顆々　　無名氏

世の中には折角の善事を無愛嬌に行ふ者衆し

トーマス、ブラオン

吾は吾れよりも智識の多き者を卯ます吾れよりも智識の少なき者を憐む

英國古諺

清潔は貧家の飾なり

林子一翁の家族に遺せる教訓

江洋逸人

林子一翁は備中倉敷の人也、勤勉にして謙恭、博愛にして事態に明かに、其一家の政治公事の勤勞、皆な郷曲の模範たり。殊とに維新革命の前後、舊社會と新社會の衝突、浪士と政府との抗爭より、厚天廣地、身を容るゝの地なきに至りしもの、翁の大傘の下に安全を保ちしもの少からず。今の政府の高官、民間知名の士、翁の恩遇によりて身を立てしもの少なしとせず。博愛の名、中國に普ねし、眞に近世の縉紳也。翁昨年を以て沒するや豫しめ遺書を作りて家人に示めす、今ま其二三を錄す。

一、子女召使を教訓奨勵するは主人夫婦の勤惰による事也、假初にも安逸を好み、奢侈倨傲の風を爲すへからす、狡黠の所作は素よリ、輕々敷人を褒貶し、愛憎偏頗の沙汰有る時は、家族と雖も蔑視して、何事も信ぜざるもの也、言語は殊更に愼み、平素の坐談夜話等にも、忠臣孝子義人貞婦奇特者都て好き人の事のみかたり聞すへし、

但し召使は商業上の門人なれば、萬事丁寧に諭すべし、

一、親族は云ふ迄も無く朋友知音等の落魄せしは、成るべく助成し、例へ無縁の人にても應分の救助はなすべし、
但し無徳者なれば說諭すべし、
一、朋友は道徳は旨とする人を撰むべし、然れども窮屈なるは惡しく、君子の交淡くして水の如しといへばむつかしからぬ方よろし、ふと一時の心醉する所有るより頻に懇親を盡し、又聊の過誤有りて意に適せざるより忽に疎遠の情をあらはし、甚しきは惡聲を發するのもあり、或はかにして見くるしきさへ高貴に居り才智聰能人に勝れしも、狡猾且鄙吝の人を友とすべからず、
但し深く交らざるのみ、町村中尋常の交もなさずと云ふにはあらず、且狡猾鄙吝も強に罵詈するは聞きにくし、
一、本分同姓は素より都而親族を祖先の目より見る時は内外の別なく同しく分身にして、子孫の末なり、懇情を盡すは勿論の事なるに、動もすれば聊の思違より隔意を生じ不和と成ることあり、皆倉卒にして熟考せず耐忍の力薄き故也、其原因を探れば多くは互の慾情に出づるか、或は婦人の饒舌より種々枝葉を生じ、又思慮なく、一家雷同し、擯斥の景況より雪上に霜を加ふるの患あり、
一、女子は他の家に嫁する覺悟のものなれど、男子は他家相續を忌嫌ふ者少なしとせず、力もはからずして獨立を好むは大成る過なり、聊の分地分金を得て知ず〳〵本家同樣の交際と成、忽疲弊を來す、毫も私心なく獨立不羈の氣象を以て資本有る家を興起せば百倍の功をも奏すべし、
一、修身齊家の稽古は稚き時のつとめに有り、若し商業を不好ば農とか工とかに方向を定むべし、おくれて後悔すべからず、然れども吏は斷じて望む可らず、若し官民の撰に預る時は己して世の爲に成就ならざる哉を考へ、或は如此の弊を矯むる等の見込有るか、又十分益有りとも毫もはまるべからず、我は得意な顏なるは甚見苦し、何程の事ありとも立腹すべからず、耐忍の力なくは勤むべからず、却て災害を醸くるもの也、しかれども家に障あれば斷然辭すべし、
因に云、諸遊藝は贅物なれども又心を養ふの機械也、家業の餘暇あらば善き友を撰み讀書詩文和歌俳諧香茶花挿或は音樂擊劍圍碁の類を樂むしは可也、然れども賭碁は即博奕也、斷て爲すべからず、右の内にて我性の好むものを習ひ置べし、聊も藝なくては老後甚淋しきものなり、又是が爲業に怠たる等の愚かなる所作あるべからず、只老後の樂なれば〳〵も若き時是に心を奪はれて人の笑を受くることゝ有るべからず、
斯いへばとて我家に聊とも不足の事有るにあらず、おのれ此家を繼しより商業上の盛衰幾度ともかぞへがたし、然れども屈佗せし事もなく、一家親類不和を生ぜし事もなく(以下十二行畧す)、故にかくのごとく好きことの揃へるは主人夫婦は云も更なり、第一己が幸是に過るものなし、此心永遠違はざれば修身齊家疑ふ所有るべからず、

思ふに此言たる必しも新奇なるにあらず。然れども翁は實に此言を實行したる人にして、格言以上の人たるを見ては此の遺言、一層味ふべきを見る。余此春、中國に遊び、成婣石坂氏の爲に林家を訪ふ。其遠人を迎ふるの習はサマリタンの風あり。思ふに知人が翁の死を問ひて哭するも、故なきにあらず。石坂堅壯翁、翁の遺墨に題して曰く、

ありのまゝ書き遺したる言の葉は
筆に聲ある心地こそすれ。

時事一斑

貴婦人慈善會

貴婦人慈善會は廿三日より一週日東京慈惠病院の爲めに開かる。方法例年に異りて皇族以上その珍藏する美術品を出し、貴婦人自ら案内して之を縱覽せしむ。

『人を射ば先づ馬を射よ』

辻氏伊澤氏等は頃者檄を其黨の全國敎育者に傳へて大に文部の改革に反對せんと打ち立てるよし。其名とする所は、曰く音樂學校を高等師範學校の附屬とせし事なり、曰く高等師範學校長の資格を引下げし事なり、曰く視學官を兼官とせし事なり、曰く敎育補助費の國庫支辨を斷行せざる事なり。然れども其實は他にあるべしと云ふ。吾人は其果して何事に在るやを知らずと雖、彼等の運動が漸く其歩を進めたるは事實なるが如し。相共に叫ぶらく『人を射ば先づ馬を射よ』と。

錦に包まれたる汚物

相馬事件は招喚又招喚し取調又取調て諭吉福澤氏にまで至れり。錦に包まれたる汚物は如何に醜なるよ、如何に怪なるよ。吾人は之を聞くだに胸惡く思ふなり。

運動會

秋風野草、運動會の季節は來りぬ。道灌山、飛鳥山、向島、御殿山。



家庭雜誌

改正 發行日 毎月一回十日廿五日發兌

定價

		地方郵税共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰)一回ニ付金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替ハ芝口郵便局

發行兼印刷人 堀田純明

編輯人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行